

# 第三十九回

神道講演全国研修大会

北陸大会

とき 令和七年六月十七日～十九日  
ところ 射水神社  
社

## 記念講演

# 射水神社御遷座百五十年の歩み

射水神社 宮司 炭谷 淳

射水神社は太古より、此の地から北西方向に約五キロ離れた二上山を神奈備としてその麓に鎮座されておりました。明治八年、官命により二上の地より高岡城本丸跡に御遷座されてより、令和七年、百五十年の節目を迎え、これまで十年ごとに式年大祭を斎行してきました。

元の鎮座地には射水神社元宮として二上射水神社が在り、式年大祭の最重要は、元宮へ里帰りの御神幸祭です。本年、高岡開町記念日の九月十三日に神賑行事、十四・十五日に御神幸祭、遷座日の十六日に式年大祭を斎行致します。

現在の鎮座地である高岡城跡は江戸時代初期一六〇九年（慶長十四年）加賀前田家二代前田利長公の隠居城として築城され、同年九月十三日に入城された日を以て、「高岡」の

開町とされます。高岡の地名は利長公により、中国で最も古い詩集「詩経」の中の「鳳凰鳴けり彼の高き岡に」という一句に基づいて名づけられました。

江戸時代以前は現在の高岡市、氷見市、射水市、富山市一部を射水郡と称しました。「射水」の地名は、平安時代初期成立の「先代旧事本紀・国造本紀」で登場するのが初見とされ、伊弉頭国を司ったのが伊弉頭国造であります。それによると古墳時代四世紀中頃の十三代成務天皇の時代、国家に忠誠を尽くした武内宿禰の孫である大河音足尼を国造に定めたことが始まりとされます。

創建は奈良時代以前で、六七四年（天武天皇三年）正月に奉幣に与ったことが見えることにより、千三百年以上に遡ります。御祭神は「二上神」、神奈備二上山を御神体とされ、二上神は、諸説の中で伊弉頭国造の祖である大河音足尼だとも言われています。

二上山は、二七四m、周囲に肩を並べる山がないため、実際よりも高く見え、富山湾岸の全域と富山平野西半分のほぼ全域から望むことが出来まして、その山容はたいへん秀麗で、神が宿る山と仰がれました。

万葉歌人大伴家持卿は七四六年（天平十八年）越中国守として五年間赴任し、我が国最古の歌集「万葉集」に、越中の自然と風土の素晴らしさを二三首もの歌に残しました。

その中で家持卿は奈良の都の「二上山」と重ね合わせ、望郷の念から越中二上山をこよなく愛し、七四七年（天平十九年）三月、長歌「二上山の賦」（巻十七、三九八五）を詠んでおります。

「射水河　いき廻れる　玉くしげ　二上山は　春花の咲ける盛りに　秋の葉のにはへる時に　出で立ちて　ふり放け見れば　神故や　許多貴き　山故や　見が欲しからむ　皇神の…」と、「射水川がふもとをめぐって流れる二上山は、春の花の咲いた盛りに、秋の紅葉の美しい時節に、立ちいでて遠く眺めると、神ゆえに貴いのか、山が立派だから常に見たく思うのだろうか。この皇神の住む山の…」と仰ぎ詠んでいます。

家持公が越中を去った六年後の七五七年（天平宝字元年）能登国が越中国から分立した後、越中国二宮であった射水神社が一宮となりました。しかし、十世紀前半、国府の近くに新氣多（氣多神社）が奉祀されると一の宮争いが起こり二上（射水神社）は力無くして敗れ、新氣多が一宮となったことが、白山比咩神社所蔵「白山之記」（国指定重要文化財）に記されております。

中世以降は、神仏混淆の時代が千年以上続き、射水神社の名が消え「二上山大権現養老寺」となりました。当時、二上山全体を境内として社領はたいへん広大であったと伝えら

れ、社領は一里四方、奈良元正天皇の御代より、越中全土の各戸より初穂米一升二合奉納の制があり、たいへん盛大を極めました。

しかし、幾度の兵火に巻き込まれ、社殿が消失し、縁起もありましたが乱世の時代に散失しております。そのような中でも、一四七五年（文明七年）九月、後土御門天皇が綸旨を下し、先例があるということで射水神社の造営には越中国棟別錢（税金）の使用を承認し、射水神社が越中国全域に及ぼす伝統的な神威を保持し続けていたことが伺われます。

しかしながら、戦国時代末期の天正年間の兵火により悉く衰頹し、養老寺に残るは慈尊院、本覚坊、金光院の三ヶ寺となりました。

江戸時代に入り加賀藩の祈禱所となって復興しました。一六一〇年（慶長十五年）前田利長公により社領の寄進があり、保護を受け、同時に戦国時代に絶えていた初穂米奉納の制が許され再興され、明治三年まで続きました。

明治元年、神仏分離、初穂米奉納の制指止め、二上山大権現は再び射水神社と改称され、明治四年、国幣中社に列せられ、官命により、同八年九月十六日、前田利長公の所縁の高岡城本丸跡の現在地に御遷座されました。

二上射水神社は戦後独立し、宗教法人は別となりますが、射水神社の千数百年の歴史そ

の大半が二上の地の歴史であります。二上射水神社は、神は常に天に在るといふ考え方から、祭りの時だけ臨時の祭壇築山に神を迎えた古代祭祀の形を今に伝える築山行事（県指定無形民俗文化財）、平安時代中期作の全国に現存する神像の中でも最大級の木造男神坐像（国指定重要文化財）を守り続け、今日に至り信仰を集めています。なお、築山行事は、戦国時代の戦乱・混乱の中、一時途絶えていましたが、前田利長公により復活されました。境内には神仏混淆の名残である慈尊院（真言宗）があり、一八五二年（嘉永五年）第十二代藩主・前田斉泰公が海防視察のため、慈尊院で一服をされてから二上山に登頂しており、その「殿様道」が参道向かって右にあり、今も多くの人が登拝をしています。

式年大祭の最重要は射水神社の元宮である二上射水神社との地縁を結ぶ御神幸祭であります。此れを斎行するに至った経緯には、明治三十三年六月二十七日に発災した高岡大火があります。此処から約二キロ離れた二番町から出火した炎が市の約六割にあたる三五八九戸を全焼し、烈風による火の粉は風下の射水神社へと至り、本殿を始めとする社殿を焼き尽くしました。火が迫りくる中、当時の加藤里衡宮司はギリギリまで御神体を本殿に留め於かれ、火が正に本殿屋根に移ると同時に御神体を奉護され、仮殿に御遷座されました。

大火五日後の七月二日に二上村の氏子等が加藤宮司に宛てて出された「射水神社御類焼ノ件二付願」には、『この度の火災に際し、氏子でありながら遠隔地であるがために消防活動が儘ならず痛感であること、しかし、不幸中の幸いにも神様に異状がなかったことを安堵し喜び、そして、氏子が「尊崇の念」懷く神様にこれ以上の不敬が無いように二上村の旧社殿を「仮殿」とされること』を願い申し出ています。心痛を極める加藤宮司にとつて、この申し出は如何に心強かつたかと思われます。その後、内務大臣へ御復座の手続きが取られました。結局、御復座には至りませんでした。未曾有の大火により社殿を悉く類焼した加藤宮司のお心は想像に堪えないわけですが、この大火を通して二上元宮と地縁を結ぶことの重要性を強く感じ取られたのではないかと思います。

翌年の明治三十四年六月に赴任された保科保宮司は、加藤前宮司の御意志を継ぎ、社殿を再建され、明治三十五年十月十三日本殿遷座祭、そして、翌日には二上氏子との絆が形となり、二上元宮への「御神幸」が初めて斎行されました。

当時の保科保宮司が、公文書に「本社ト氏子トノ間、自カラ疎隔ノ姿ニ相成、遺憾ニ堪ヘス」として「今回御社殿新築竣工ノ上ハ遷座式挙行ニ付、之ヲ好機トシテ旧社地ニ上村分社ヘ神幸之例ヲ肇メ度」とあり、さらに「旧社地ヘ神幸相成候者、氏子モ歡迎シ奉リ、

大二神慮二叶ヒ、永ク神人一和ノ基ヲ啓キ」と記されています。当日の様子は、「知事宮司等騎乗五六。余ハ皆徒歩ス列外諸員幾百人、腕車八十輛ノ多キニ至ル」とあり、華麗雄大、且つ大規模な神幸であつたことが窺えます。

元宮御神幸は、御祭神と二上氏子始め地域の人々がこころ通わせ、国家の繁榮、地域の安寧を祈る「神人一和」の最重要な祭りであり、この後、大正二年の遷座四十年祭からの途中中断もありましたが、式年大祭で斎行されています。

戦後、国家管理から外れ官費を絶たれ、氏子もおらず再び衰頹極まりない状況となりました。復興に立ち上がったのが高岡政財界のトップで産業基盤を築いた木津太郎平氏であり、その意志を継がれた元内務官僚・参議院議員の館哲二氏であります。

館氏は奉賛会組織を立ち上げられ、高辻武邦富山県知事が総裁、堀健治高岡市長が副総裁、自らは復興活動の先頭に立てるように奉賛会長に就任され、奉賛会役員には行政そして政財界のお歴々が就かれ、復興にあたられました。

遷座五十年以来、混乱する時局のため途絶えていた式年大祭を再興され、昭和二十九年に遷座八十年祭と共に、古式の御神幸祭を斎行されました。

この奉賛会の多大なる御力と、十年毎の式年大祭の斎行と共に御神威が発揚され、御奉

賛の誠が捧げられ、今日まで神社としての輪郭が整えられました。

百五十年式年大祭斎行にあたり、記念事業も執り進めています。令和五年六月に式年大祭奉賛会が結成され、記念事業として二上元宮への御神幸の際に使用する「御鳳輦の新造」と、「本殿を始め社殿の屋根銅板葺き替え」「神苑整備」を執り行うことが決定しました。

「御鳳輦」の新造にあたっては、富山県産にこだわり、地元の材料、職人で造り上げることを第一として、高岡の歴史、技術が盛り込まれた鳳輦を目指し、各業者の方々には夫々の匠の神髄によりたいへん麗しくお造りを頂いています。

「社殿屋根銅板葺き替え」事業は、「常若」の精神の下、約五十年ぶりの事業であり、昨年の四月より外拝殿両脇の回廊から始まり、順調に執り進められ、本殿を残すのみとなった九月十五日に仮殿遷座祭を斎行。神さまの仮殿としたのが新造中の御鳳輦の躯体の部分であり、本殿前に仮殿として安置し、神さまを御遷ししました。神さまには約七カ月の間、仮殿にお鎮まりを戴き、本殿屋根工事も終了した本年四月二十二日、お還り戴く本殿遷座祭を斎行。仮殿遷座祭と同じく浄閑の午後七時から、鶏鳴三声を合図に御還りの還御が始まり、大変な緊張・重圧でしたが、無事に御還り戴きました時には、安堵の心が溢れる思いでした。

翌二十三日、例祭齋行の良き日に、畏くも天皇陛下よりの御幣帛料をお供えする奉幣祭を齋行。また、本殿遷座祭・奉幣祭の両日、神社本庁田中総長が本庁使として御奉仕賜り、神社本庁からの本庁幣をお供え戴きました。田中総長が祭典終了後の直会のご挨拶で「遷御・遷座祭は神職人生の中で一度二度、有るか無いかの経験」であると言われました。私自身、正に最上で誠に誉れ高いご奉仕であり、この経験を此れからの神明奉仕に生かしていきたいと思います。

「神苑整備」につきましては、この高岡市は歴史都市として、高岡城跡の高岡古城公園は平成十八年に日本百名城に選定、平成二十七年に国指定史跡に指定されております。国史跡指定に先立ち、平成二十二年から射水神社の本殿廻りの境内地の発掘調査が行われ、本丸を囲む土塁の裾に裏込め石を伴う二段の石積み、検出された花崗岩に「卍」の刻印と矢穴が打たれており、築城期の遺構が良好に保存されていることが確認されました。今後、「高岡城跡」の魅力を伝える神苑整備に取組んでいきたいと存じます。

現在の鎮座地である高岡城跡は一六〇九年（慶長十四年）に加賀前田家二代前田利長公の隠居城として、加賀・越中・能登から一万人が動員され、半年で築城されました。高岡城の地は、加賀藩領百二十万石の加賀・越中・能登三国の要に位置に在り、築城当時、未

だ豊臣氏が健在であり徳川氏は完全に天下統一したわけではなく、父利家以来、豊臣氏に仕えてきた利長は、その両者の間で苦しい板挟みの状態でした。母芳春院（まつ）を江戸へ人質に出し、異母弟の三代利常に秀忠の娘をめあわせています。徳川との和平路線を推進しつつも、一方では有事に備えた実用的な城を早急に完成させる必要性がありました。高岡城は、複数の郭を土橋で繋げる「重ね馬出」で構成されており、極めて防御性の高い城でした。しかし、利長は一六一四年（慶長十九年）五月二十日、五十三歳で高岡城内にて逝去します。大阪夏の陣で徳川氏は豊臣氏を滅ぼし天下統一なしとげると、一六一五年（元和元年）、「一国一城令」を布告し、高岡城は廃城となりました。

しかし、三代利常は水濠を埋め立てず、廃城後も高岡町奉行所の管理下で、加賀藩の米蔵・塩蔵・火薬蔵・番所などが置かれ、軍事拠点としての機能は密かに維持され、その潜在能力を持ち続けました。江戸時代初期の当時、城の改修に難癖をつけられ、多数の大名が改易になったことからみても、現存そのものが「奇跡的」であります。総面積の約二十一万㎡の内、約三割が人口の堀です。曲輪・堀は築城当時のままで、高岡城の保存は、加賀藩の歴代の藩主、藩士の懸命の努力の賜物であります。

明治の初め、県から民間払下げの命令が下り、再び高岡城跡は破壊の危機を迎えます。

しかし、高岡町民による公園指定の請願運動が興り、その町民の熱い思いを代表した第十七大区長・服部嘉十郎氏らの努力により、明治八年七月四日「高岡公園」として指定を受け、城郭遺構の破壊を免れました。

同年九月十六日、公園指定の追い風ともなった、射水神社が御遷座されました。今年は高岡城跡公園指定百五十年の嘉辰であります。遷座百五十年の歴史は正に高岡古城公園の歴史であり、共に百五十子を奉祝したいと存じます。公園指定に多大なご尽力をされました服部嘉十郎先生の顕彰祭を七月四日に公園中の島頌徳碑前にて斎行致します。

高岡城跡は、国宝瑞龍寺、国史跡の前田利長墓所などと同様に、「近世高岡の文化遺産群」を代表するものであり、高岡市にとって極めて重要な加賀前田家関連遺跡の一つであります。

射水神社は創建以来、二上山麓時代幾度の兵火、そして遷座後も高岡大火により、幾度の衰頹の危機がありました。その度に多くの先人たちの多大な尽力により、復興を果たしています。

遷座百五十年を契機に、愈々御神徳の発揚に努め、高岡の礎を築かれた大伴家持卿、前田利長公を始め、高岡の発展、そして神社の復興に尽くされた多くの先人たちに感謝の祈

りを捧げる式年大祭と致したく思います。

そして、射水神社元宮と千数百年の悠久の歴史を共有し連携しつつ、神人一和の心にて、高岡と地域の活性・発展に繋げていくことを目指して参りたいと思います。

ご清聴いただき、誠に有り難うございました。

## 第六十三回神宮式年遷宮を控えて

椿大神社 宮司 山本行恭

「明るい社会づくり運動」という清掃奉仕を中心とした活動を展開する全国組織があり、私はその三重県協議会の会長を務めております。

ある時東京で会議があり、私は都合がつかなかったため、事務局長が代わりに出席いたしました。

その会議の中で、三重県で「明るい社会づくり運動」の全国大会を開催したいという打診がありました。そこで三重県に関連して、神宮式年遷宮のお木曳行事の話題が上がりました。

戻った事務局長からの会議内容の報告のなかで、「お木曳行事とは何ですか。人が集まるとしても十人程度ですか」と問われ、三重県人としての意識の低さに大変落胆しました。

そこで私は、「必ず二百人は集めてみせる」と断言し、結果として、目標を大きく上回る三百名が参集し、盛会のうちに奉仕することができました。

当初は「とても無理だ」という声も多く、計画が頓挫しかけたこともありましたが、しかし、お木曳行事という国家的大行事の意義を改めて見つめ直し、「三重県人としてこのままでよいのか」という強い思いが原動力となったのであり、この経験から、神宮に関わる行事については、もっと広く周知しなければならぬと強く感じるようになりました。

神宮式年遷宮に関わる祭典として今年五月には山口祭、六月には御みそま杣始祭はじめさいや裏木曾での伐採式が行われました。私も幸いにしてこれらの祭典に参列させていただく貴重な機会を頂き、大変ありがたく感じております。(令和七年)

神宮では、このような一つひとつの祭りを通して、次の式年遷宮に向けて準備が着々と進められています。

しかしながら、その意義や内容は、一般の方々にはほとんど知られていません。このままでは、国家的にも重要な式年遷宮の意義が薄れてしまいかねません。

式年遷宮は本来二十年ごとに行われますが、歴史の中で変更されたこともあります。たとえば、終戦直後は国土復興が優先され、国民からの奉賛も難しいという理由で、昭和二十四年に予定されていた遷宮は四年延期され、昭和二十八年に行われました。それ以降は二十年周期が維持され、現在に至っています。

また、遷宮に関連する重要な要素として「御用材」があります。近年、伊勢神宮専用の国有林が整備され、その広さは東京ドーム約三千七百個分にも及びます。

御杣始祭では、樹齢数百年から千年を超える大木が選ばれ、厳粛な儀式を経て伐採されます。木は内宮・外宮それぞれに用いられるため、倒れる方向や距離までも計算され尽くしています。伐採の際には、山の神に対する祈りが捧げられ、「大山の神、左よき登り山、一本寝るぞ」と。「いよいよこの木を倒します」という宣言のもとで作業が進められます。

伐採された御用材は、長野・岐阜から愛知、そして三重へと運ばれます。六月には伊勢大橋で盛大な受け入れが行われ、数千人が集まる一大行事となり、地元での奉祝行事や山車なども出されて大賑いになります。道中では各地で歓迎の祭りが行われ、まさに地域を挙げての奉迎となります。

本年、初めてこのルートに鈴鹿市が組み込まれ、私自身も地元の関係者として大きな喜びを感じました。市長をはじめ商工会議所会頭・国会議員・県市町議員や多くの方々が増加し、地域一体となって御用材を迎え入れました。

こうした一連の行事は、神職であつても詳細を知らない人が多いのが現状です。しかし、これは単なる伝統行事ではなく、日本の精神文化そのものを体現するものです。

特に「鳥総立<sup>とぶさたて</sup>」と呼ばれる儀式では、伐採後の木に新たな命をつなぐ意味が込められています。これは古く万葉集にも記されている由緒ある儀式であり、自然と共生しながら循環していく日本独自の思想が表れています。

また、遷宮には膨大な資金と資材が必要です。前回は約五百五十億円、今回は約八百億円を超えるとも言われています。また、装束や神具に用いられる材料、たとえば鳥の羽なども国内で確保することが難しくなっています。職人の減少も含め、これらは今後の大きな課題です。

二十年という周期は、単なる慣習ではなく、技術や文化を継承するための重要な仕組みでもあります。若い世代へと技術を引き継ぎ、常に新しいものへと更新していく。これが式年遷宮の本質でもあります。

これから約八年後、次の大きな節目を迎えます。ぜひ皆様もこの意義を理解し、それぞれの地域で広く伝えていただきたいと思えます。そして共に、無事に大行事が成就することを願いながら、その時を迎えたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

## 猿田彦さん

田 中 淳

今回はご祭神であります、猿田彦大神様についてお話をさせていただきます。

神社に参拝に訪れた子どもが、「猿田彦さんは、猿の神様」と言っていました。神様のお仕えとる「神使」として動物はありますが、動物の名が付く神様は、他には見る事ができません。

「日本書紀」に記されるお姿は、「鼻の長さ七咫ななあた、背の長さ七尺余りななさか、当に七尋ななひろと言うべし。」とあります。即ち、鼻の長さが七咫（約一二六センチ）、背の高さ（座高）は七尺（約二二センチ）あまり、身長は七尋（約一二・六メートル）そして、目は鏡のようで、その照り輝きはホウズキのようだ。というのです。大変立派なお姿であることを威厳を強調しています。猿の姿とは到底思えません。

実際、日本に生息する猿は「ニホンザル」一種類だけで小型です。世界には、大きなゴ

リラ、チンパンジーから手のひらに乗る小さなピグミーマーモセットなど、約二五〇種類程の猿が生息しています。ニホンザルは、数十万年前に日本が大陸とつながっていた頃に侵入し、大陸と離れ進化したと言われます。本州の北端の青森県から鹿児島県の屋久島まで分布する日本固有種で、下北半島の猿は、世界一北で暮らす猿で真冬は氷点下二〇度以下の吹雪の中でも生き抜き、人間以外で最も寒い場所に進出した霊長類です。

昨今において猿は、獣害の動物とされています。人間の好みの植物性食物が重なり、農作物のほとんどが被害の対象となっています。また、山里だけで無く、街中にまで現れ被害をもたらした報道がされることが頻繁です。近年のこのような行動は、過去の歴史の中で殆ど記録がないようです。猿との接触は頻繁でしたが、馴染みの薄い動物であり、それよりも山の神様としての存在が大きかったのです。

猿が出て来る童話が多くあります。その中でも有名な話は、「桃太郎」と「サルカニ合戦」です。皆さんもご存じだと思いますが、桃太郎の話は、川で流れてきた桃から生まれた桃太郎が、悪い鬼をお供に猿・きじ・犬を引き連れて退治します。「サルカニ合戦」は、おにぎりを食べようとするカニに、柿の種をもった猿が、おにぎりは食べてしまえば無くなるが、柿の種はやがて大きな木となり食べきれない程の多くの実になるとそのかし、交

換します。何年がたち、柿の木にたわわに柿の実が生ると、猿は、カニに木に登れないから替りに柿の実を取ってあげると素早く木に登ります。美味しい柿の実を食べ始めます。

カニは下から、美味しい柿の実を取ってくれることを言いますが、猿は固く熟してない柿の実をカニに投げつけ、当ったカニは死んでしまいます。その時に子カニが生まれます。子カニは、猿をこらしめるために、栗・蜂・牛糞・臼と共に作戦をたて、無事にこらしめることに成功する話です。方や鬼を退治する勇敢な良い猿、方や猿知恵を働かす悪い猿が描かれて、表裏多様性を表現されています。

猿を使用する、言葉に「猿芝居」「猿知恵」「猿真似」「猿楽事」、ことわざには、「猿も木から落ちる」「猿の尻笑い」「猿に烏帽子」「犬猿の仲」など、多くあります。

また、猿は馬をまもる守護神であるという伝承もあり、大名屋敷では、馬の安全を願う祭礼として厩の周りで猿を舞わせる猿曳という風習がありました。現在の猿回しはこの名残です。

猿の話が長くなりましたが、神様のお姿には結び尽きません。

猿田彦大神は、天照大神のお孫・瓊瓊杵尊一行が地上に降臨されるとき、天の八衢でお迎えになり、「吾は国つ神・猿田彦大神」と申されます。地上における第一の権威者であ

ることを告げたのです。そして、天照大神より授かった稲穂の神勅ともに稲の種を委ねられた瓊瓊杵尊一行を九州の高千穂まで先導啓行されたのです。この時に授けられた稲の種は、日本人生きてゆく上に欠くまじき物であり、現在も天皇陛下がお田植えされ日本の道統となっているのです。そして、この稲作の方法「田作り」を教えたのが猿田彦大神です。

「サ」は早苗や早乙女の「サ」であり、神稲と書き「サ」とよみ、「ヒコ」は男子であり「神聖な稲田の男」と解する説。当社の先代山本行隆は、「サ」はあらゆることを狭別けること、審判<sup>さにか</sup>すること、「ル」は流転、守り導くこと、神化すること。「ヒ」は太陽。「コ」は太陽の子を意とするといわれました。

また猿は、土地の精霊や豊作の神と据えられ、そのような猿が出没する神聖な田に立つ地主神とみる説。

猿は日が昇ると共に、大きな声を出し行動をはじめます。その際には太陽の光を受けて体を温める姿があります。当に太陽の神・天照大神との力をいただき行動する説など様々な考察がなされています。

猿田彦大神は、亦の名を道祖の神、道別きの神、興玉の神、田中の神、船玉の神、精大

明神、塞神、土公神、山の神、氣神、庚申の神など千変万化の活躍をされています。

「古事記」には、瓊瓊杵尊様一行を天八衢に待つ姿を「上は高天原を光らし、下は葦原の中国を光す神」と記されおり、天上を照らし導き、地上の生けるもの一切を輝かし導き、堂々と悪しきを遮り、天と地を結ぶ、調和を計られたのです。

江戸時代の国学者・山崎闇斎が、「道は日の神の道にして、教えは猿田彦大神の導く所なり」とし、わが国の根本は確かに天照大神によつてたてられた。しかし、この地上の人々を教え導く元を開いたのは猿田彦大神であるのです。

どうか、偉大なる猿田彦さん、偉大なるご神徳をいただかれ、日々ご家族元氣に健やかにお過ごしください。本日はようこそお参りいただきました。

(三重県 椿大神社 禰宜)

# 神様のお引越

藤 原 正 宜

大神神社には各社同様指針がある様に「摂末社純木造社殿等宮大工工事立案並施行規則」という規定がある。

これは大神神社境内諸社殿並び諸施設諸設備統一と整合性との総合的管理保全品質を目的とした摂末社純木造社殿等増改築施工実施の立案時の留意点並手順等に関する事項を（神社本庁憲章第十条三項に準ずる）定めたものである。

大神神社末社天皇社は同神社拝殿の南方にある天皇山に鎮座し第十代崇神天皇を奉齋している。令和五年十月二十七日に竣功した本殿等改修工事の計画、設計を進めて行く上で考察した事項と改善した要点を説明する。

・造営 改築についての考察（計画・方針）

再建する（元の位置に戻し 元の位置に奉建す）

神社建築は本来木造であり、建物（御社殿・構造自体）は改善されても同じ場所と同じ様式で繰り返し返す事が常例であり、旧に復す事が基本である。建築作業的誤差による（やむをえざる大工・木工作等）以外は変えないことを原則とする。

#### ・様式的设计

本殿創建設計履歴を考慮せず安易に社の形式を変更することは冒涇に繋がる恐れを伴う事から現況を踏襲する改修方針とした。

#### ・社殿様式

歴史的理理解は大社造から改善された大鳥造となり、大鳥造から一転した住吉造の正面に庇を懸けたものが春日造となり、当社殿はその延長にあると思われる。きざはし階には屋根はなく、一間社で妻入り、屋根は檜皮葺き、千木二組、鯉木二本である。現存建物の履歴がはつきりせず、本殿の造営履歴資料から顕著な継承意義価値が確認出来ず、現部材を活かした部分修理をする文化財建造物的保存対象とはせず新規建物として再建とした。

#### ・予算の確保

令和五年度神社一般会計の予算とし、合わせて奉賛取扱とした。しかし、造営奉賛会等特別会計、組織を設けず主幹課は管理部とした。

併せて本殿遷座祭等の祭典に関しては関係部署に依頼。撤下品は本殿古材を使用し銘々皿を謹製した。

・資料調査及解体調査

大正二年に奈良県知事に対して提出した改築図面、仕様書、写真が存在した。しかし、本殿解体で棟札は見つからなかったが現存建物は正期施工のものと思われる。その後遷座を伴わない修理を含めると十一回改修履歴が確認された。また資料から今回工事着手とは違い鯉木は三本と確認された

・実施設計（考慮、改善した部分）

社内の類似した社殿と比較検討した結果、軒付けの納め方に差異が在ったので既存を踏襲するという事前の改修方針に則り、軒付の変更を実施。鯉木を三本に変更。箱棟は雨による腐朽を防止する為銅板巻きを施した。破風板眉は既存原寸図を確認の上割付を変更。長押断面形状は長押曳材と角材の混合であったが、強度面、埃溜まり解消の為角材に変更。御扉召合わせ定規縁は扉と別物になっていたが、祭典作法上右扉に固定し、化粧部材は全て檜材に統一した。階下部は雨がかりの為将来の部分的修理を想定し加工納めとし、宝珠柱を引独子、込せんども、込せんどもとした。外基壇板玉垣は更新し、内部齋庭は神宮と同様白玉石を敷並

べた。外基壇石積み<sup>の</sup>歪みは既存石を再利用し据え直しを行った。その他、殿内調度品、飾り金具、塗装工事、賽銭箱新調、境内の不陸調整、石階段の補修等境内整備も行った。

境内社殿の存在は物理的のみならず神社の信仰を堅持継承する為にもその意義は高い。建物ほか工作物等改修時に於いては神社の境内並びに社殿群維持、更新に対する明確な意思を基に施行されなければならない。社寺建築の歴史的価値意識も重要視されなければならない（文化財）ところを重んじながらも現状の歴史的価値意識も重要視されなければならない。大神神社は御本殿を設けず直接三輪山に祈りを捧げる原初の神祭りの様を創祀以来、今もなお、伝えていること事態に意味があり、特異な様式に意味がある<sup>と</sup>考える。

来る令和十五年に第六十三回神宮式年遷宮を迎える。去る令和七年五月二日、山口祭、<sup>このもと</sup>木本祭から、遷御、奉幣、御神楽に至るまで三十数度に及ぶ祭典・行事が行われ、九年の歳月をかけて遷宮への諸準備が執り進められる。皇祖天照大御神をお祭りする神宮はご創建以来御歴代の天皇の大御心をいただき、古儀に則り、聖旨を仰ぎ、造営と祭祀が営まれてきた。この二十年に一度、宮処（御敷地）を改め、古例のままに御社殿や神々の調度品である御装束神宝をはじめとする全てを真心込めて奉製申し上げ、大御神に照り輝く御正宮へお遷りいただく式年遷宮は神宮最大の重儀であり、日本国民の奉賛によって齋行され

る。第四十代天武天皇のお定めにより、次の持統天皇の御代に初めて齋行されて以来「皇家第一の重事、神宮無双の大堂」と重んじられ、今日まで千三百年、国家国民の安寧を祈り、六十二度に及ぶ長い歴史と伝統が継承されてきた。

また、御社殿等で二十年間使用された木材は遷宮終了後、使用可能な古材は希望される全国の神社へ譲与され、各神社において社殿等に有効に活用されている。

第十代崇神天皇の御代、天照大御神は宝鏡奉齋の御神勅の随に宮中に「同床共殿」にてお祀りされておりましたが、崇神天皇六年初めて皇女豊鍬入姫命とよすきいりひめを御杖代とし神璽みしろしを託されて、倭笠縫やまとのかさぬいむら邑に磯堅城神籬しきひもろぎを立て、お祀りされました。その後、第十一代垂仁天皇の御代に倭姫命が御杖代として、五十鈴川の川上（現在の神宮内宮）に御遷幸の後も、この御蹟あとを尊崇し大神神社摂社檜原神社として引き続きお祀りし、この地を「元伊勢」と敬仰けいぎやう申し上げ、今に伝えている。当社の境内には前回の第六十二回神宮式年遷宮の神宮殿舎撤下材の中でも、創祀に御神縁格段に深き倭姫宮参道鳥居他の譲与を受け、平成二十七年十一月二十八日に古儀に復した元伊勢に相応しい三ツ鳥居を御神威、新たに建替を出来た事は、御神慮に適う真に意義深くも有難い事である。

また、式年遷宮は、我が国の文化の淵源を永遠に継承して後世に伝えとともに、伝統技術の保存継承にも大きな役割を果たしている。弥生時代の穀倉に起源を持つ「神明造」という建築様式で、その根元には米を主食として命を繋いできた日本の風土や文化を守り伝え、神道の理想である常若<sup>とこわか</sup>の精神を宿している。

常に若々しく瑞々しい状態で神々をお祀りする事によって、遷宮が繰り返される度、御神威を新たにされ、大御心をいただき、我々が原点に立ち戻るその精神をも受け継いでいる御遷宮・遷座（神様のお引っ越し）は単に物理的な行為のみならず変わる事のない「常若の気持ち」を維持し継続する事が本源と考える。

（奈良県 大神神社 権禰宜）

# 浜の真砂子が米となるまで

岡 田 順

「大神は いつまで守る千代かけて 浜の真砂子が 米となるまで」

先程の祭典の中で、太鼓を叩きながら最後にこのような唄を奏上致しました。私は、倉神社に詠い継がれるこの唄を、古代から続く日本の風景と人々の祈り願いを感じながら歌い続けています。

「神様はいつまで守ってくれるのですか。長い長い間、浜の砂がお米になるまで、ずっとですよ」

海に囲まれた国、日本。波は寄せては返すをくり返しています。波のように毎日毎日御

神前で祈ることによって、神様も波のようにご神徳を返してくださっている。そのように、次の日もまた次の日も波は永遠に続いていきます。海岸の砂浜の砂は、波打ち際で舞っています。それがお米になるくらいと言う。お米は大切な食べ物象徴です。お米になるくらいずっと守られたら、何だかどんな想いでも届くような気持ちになり、今日明日とすぐに結果を出そうとせず、小さな事を積み重ねていこうと思うのです。

今年は米騒動が起きています。国産米、外国産米、ブレンド米、古古米等、値段の高い安いでなかなか落ち着きません。

私は八年前から自分でお米を作っています。私は、神職になるよりずっと前から料理を業として生きてきました。店を経営して十年になりますが、自ら作ったお米をお客様に提供できるように、六年が過ぎました。ほんとうに有り難いことだと思っています。

皆様の中では、お米を作られた経験があまりでしょうか。

毎年の事ですが、お米作りは私にとって大冒険です。たったひとつの粳種が何百倍にも成るのですから。

粳種は、まず塩水に漬けて、沈んだものを熱めの湯に浸して消毒します。次に流水に浸

して、一週間程すると発芽します。苗箱に発芽した籾を撒き、土を被せます。十段程の苗箱を重ねビニールシートで覆い、光を遮り温度と湿度を上げます。また一週間程すると、芽は白く伸び、箱から飛びだしてきます。そうしたら苗箱を浅いプールに並べ日光を通すシートを被せ緑化させ苗ができるのです。ひと粒の籾種が二十センチ程の苗に成長するのに、そんなに時間はかかりません。

そうして育った三千本程の苗を背中にかつぎ、私は田植機に乗って大海原へと出航するのです。田植機は水の張った田んぼを進んで行きます。チャチャチャと音を出し通り過ぎた後に籾が植わっていきます。四つの手で植えていくはずが、時々、小さな穴だけが残り何も植わっていない所とありますが、気にしません。後で自分の足で植え直せばいいのですから。

私は神主ですから、田植えの前には、白武稲荷の神様に祝詞を奏上します。（白武稲荷様は、もともとこの地域の田畑の守り神として祀られておりましたが、都市開発の過程で、いつの頃から我が家の庭へ遷座されたお稲荷様です。現在は庭のお社も老朽化して家屋の中へお祀りしております）

手肘に水泡掻き立て、内股に泥掻き寄せて面白く敬いて田植えをさせていただきます。

そして秋には美しい黄金色の稲穂が実りますようにと。

これから先。大風の大雨に遭うかも知れません。田んぼの堰が壊れて水が流れ出てしまいかも知れません。機械が突然動かなくなるかも知れません。お腹が空いて動けなくなるかも知れません。大冒険はまだまだ続くのです。

誰かのお手伝いも必要です。子供達や初めて田植えをする人は、どんどん素足で田んぼに入り、動けなくなつて笑っています。

もうそろそろ疲れてきたかなあと振り返ると、あっちこっちに苗の植わっていない隙間が見えたり、あっちこっちに足跡が残っています。これが、現代の田植えの風景なのです。しかしながら、作業を終え道具や足を小川で洗う頃の夕暮れ、西陽が差す水面はこの上なく美しい風景です。そこに集まる虫やカエルはやさしく笑つて見えるのです。

こんな風景を残してくれたご先祖さまに感謝をしています。こんな風に包んでくれる大自然に感謝をしています。このように、生かされていることに感謝をしています。

そして、このような大冒険の後に美味しい食べものになってくれるのです。お米つて、ありがとうのかたまります。有り難くいただきます。

皆様におかれましても、是非地域の米作りに参加してみてください。

浜の真砂子が米となるまで、ずっと続きますように。

(広島県 倉神社 宮司)

終

# アンパンマンになって幸せになろう！

鈴木 明子

皆さん、NHKの朝ドラ「あんぱん」を見ておられますか。漫画家やなせたかしさんの自伝的ドラマで、子供達に大人気の漫画「アンパンマン」が生まれる背景が良く分かります。アンパンマンは、困っている人を助ける事を使命としており、お腹がすいた人には自分の顔を食べさせて助ける、正義のヒーローです。このアンパンマンをやなせたかしさんがいかに愛していたかは、

「僕は死んじやいますし、でもアンパンマンは生きる。自分の晩年にこのヒーローに巡り遭い、もう夕日です。その君に会えて良かった。」と言う言葉でも分かります。

アンパンマンの姿は、「本当に強いヒーローは、自分以外の人の為に自分自身を捧げられる人」というやなせたかしさんの考えを反映しております。

彼は大正八年生まれで日中戦争に出征しております。日本における戦争の正義を信じて

戦いますが、戦後価値観が一変し、何が正しいか分からなくなってしまします。その時楽しい事、嬉しい事はいつの時代になっても価値観が変わる事は無い、楽しい漫画を書こうと思ったと言っています。こうやってお腹が空いた人には、自分の顔を食べさせる正義のヒーローアンパンマンが誕生する訳です。

さて、話は変わりますが、皆さん、「黒川伊保子」という女性科学者、脳科学者をご存知でしょうか。脳の仕組みを解明して人工知能を研究しておられる方ですが、彼女は「英雄の書」という本の中で、脳の仕組みは実に神秘的で、神様がそのように創られたとしか言いようが無い、と言っております。即ち、人間の脳は他人のことを気遣ったり心配してあげると、脳内ホルモン、が沢山出て免疫力が高まるのだそうです。一方自分のことだけ考えていると、恐怖や不安ばかりが増幅されるのだそうです。なぜそうなるのか、今の科学では分からないそうです。

何年か前にスエーデンで炭坑の落盤事故がありました。三十メートル下の地下が崩れ、三十三人の炭鉱夫さん達が生き埋めになり、七十日間の後、奇跡的に全員を無事に助け出すことが出来ました。何故全員無事だったのか、黒川さんは次のように言っています。

リーダーの人が三十三人を三つのグループに分けて八時間仕事、八時間寝る、八時間仲

間の事を心配する、見守る、と決めたそうです。この仲間の事を心配する、氣遣う、という事をしたせいで、脳内ホルモンが出て免疫力を高め、生きる意欲を失わずに済んだと考えられると。

この他人の事を氣使うというのは、日本人の美德の一つです。

やなせたかしさんのアンパンマンが自分の顔をちぎって、食べさせてあげるそのやさしさは、やなせたかしさん自身の優しさでもあります。朝ドラを見ても分かります。

軍隊でカレーを美味しい、美味しいと食べている戦友に、彼はそつと自分のカレーを差し出すのです。元々彼は優しい性格だったのですが、実に日本人らしい行動です。

一般的に日本人は、草食系の民族と言われています。勤勉で、正直で親切と明治時代に日本に初めて来たアメリカの大使、ハリスはその日記の中で、この国の民族は、なんと勤勉で、正直で、親切なのだろうかと感心しております。

私達の象徴であらせられる天皇陛下も

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風の立ち騒ぐらむ

明治天王陛下の御製ですが、昭和天皇陛下も大東亜戦争の時に、この御製を詠まれたと言われています。

さて、アンパンマンに見られる日本人の美質はこれだけではありません。漫画アンパンマンに登場するキャラクターの多さは、世界一でギネスブックにも記載されております。メロンパンナ、カレーパンマン、バイキンマン、ドキンちゃん、アボガドじいや等々。これは、全てのものに神の命が宿るという日本の神道の考えそのものです。

今こそ私達は、アンパンマンのように、身を削ってでも他人を助けると同時に、自分も幸せになり、神の命が宿る全てのものを慈しんで、生きていこうではありませんか。

（滋賀県 立木神社 権禰宜）

# 驚異！A―神主

中山直紀

本日のお祭りへようこそお参りでした。本日も心を込めてお祭りをご奉仕申し上げました。

さて、突然ですが、ちょっと現代的な話をします。とある後輩神主がぼそつと言ったことに端を発するのですが、「A I 神主」というものについてのお話です。

昨今、進化の著しいA I。A Iの台頭で失われる仕事がたくさんある、と耳にすることもあるでしょう。

また、大袈裟なあ。と思われるでしょう。私もそう思っていました。

私が夢に見ていたA Iと言えば、鉄腕アトムやドラえもん、C―3 P OやR 2―D 2、ジャンパーソンやビーロボカブタック……さすがにマニアックですね。

とにかく創作物のなかで出てくるもの。

そしてそれが発展したらどうなるかが描かれたのがターミネーターやマトリックスのような作品ですよ。

ところが現実にあったAIと言えばテレビゲームのオートプレイ機能ですよ。私と同世代の方は回復してもらいたいのに効きもしない即死魔法を唱え続けたアイツを忘れることはないでしょう。

そんなものに仕事が奪われる？ 何言ってるんだか。

十二年前に生成AIが話題に上ったときも、文章が稚拙で使い物にならない。どう考えても自分で書く方がまともと言う評価でした。

だったのですが、信じられないことにこの一年でとんでもないことが起きています。

簡単にいうと、ほぼドラえもんです。

もちろん未来の秘密道具ではありませんが、思考能力、コミュニケーション能力、情報処理能力は人以上と言って差し支えなく、文章力もプロレベルを一〇〇パーセントとすれば、七〇パーセントのクオリティを発揮します。それって一般レベルと肩を並べると言って差し支えないのではないのでしょうか。更に、画像、動画、音楽などなど、様々なものを作り出せます。

クオリティはプロには及ばないかもしれません。しかし、驚異なのはその生成速度です。人間では到底追い付けない速度で作業を進めていきます。

更に自動で電話応答までできるようになると言うのです。

そしてそれがこの数年、いや、一年での進化です。今後、その進化は加速度的に早くなつていくでしょう。

ここまで来たらお分かりですよ。人の仕事が奪われる未来は明らかです。

なら我々神主もいずれは？ と考えるのです。

そこで、本当に神主は人間でなければならぬか、神主とはそもそもなんなのかを、AI神主という架空の存在が成り立つかどうかで考えてもらいたいと思います。

先ほど申し上げたとおり、事務仕事はほぼAIにふれます。決裁のみ下せば良いくらいになるかもしれません。

電話応対もですね。

祝詞作文、文章執筆と情報収集はAIの独壇場です。完璧でなくとも十分すぎる祝詞が出来てくる未来は遠くないでしょう。

掃除。お掃除ロボットなんていうものもあります。あえて言いましょ。本殿内陣とい

うご神体のお側であり官司でもまず入ることがない場所の掃除すらして貰える可能性。これはより清浄を保つ為に今後必須になるやもしれません。

会議、そもそもしなくて良いならふりたいです。……まあ、やらなくても良い未来は見えそうですよね。

お守りの授与。自動販売機を導入されている神社も少なくないことを考えれば、すでに置き換わっているとみれるのかもしれませんが。とはいえ任せられると言ってもできることなら避けたいというのが人情って物でしょう。

そして神事。祈祷やお祭り。本来であれば体躯からだを持たないAIにとって絶対にできないものではありますが、もし体躯を手に入れたら。そのままにドラえもんやアトムのように。正確無比な祭儀を行えるという想像は難くありません。そう、皆さんからすれば、正解を伝えられなければ、本当はAIロボットであることに気付くことも無く行ってしまうことでしょう。

当然その体躯はまだありません。しかしいずれでできる可能性があることは、技術の発達から明らかでしょう。空飛ぶクルマ？ 星間ロケット？ リニアモーターカー？ どれも夢幻、空想だった物だったはずです。それがもうそこまで来てしまっているのです。想像

は現実になるのは間違いない。ですが、さすがに体躯が完成するのは当分先……と油断するなれ。それがオンラインです。

祈祷や祭をネットで流し、それをお参りするなどといったことをする神社があります。当社でもインスタグラムで祭風景をライブ配信しています。私は決して参拝とは認めていませんが、オンライン参拝などという謎の言葉を使われる方もいるようです。

参拝？ 神社に参って無いのに参拝とはこれ如何に？

遙拝ならまだ分かります。けど参拝は無いでしょ。参って拝礼するのが参拝ですよ？

だから私は当社での配信を必ず「視聴」という言い方しかしていません。決して参拝ではありません。何をしているのかをお知らせしているだけです。

そしてこれを参拝とするたまづいことが出てきます。それはそこに映っている神主です。

それは、本当に実在の神主が、実際に行っている祭りですか？ 本当に行われている祈祷ですか？

だって、AIは動画すらあつという間に生成できるんですよ？

つまり、オンラインでのご祈祷ということを行えば、AIに本来存在しないはずの体躯を与える事になるのです。

そう、すでにA Iに体軀は与えられつつあるのです。

ではそれは本当に祭たり得るのか。

祭式はおそらく完璧です。まさに理想の祭式が行われることでしよう。

祝詞も七〇パーセント、いやさすがに情報量がまだ少ないと思うので五〇パーセントくらいかもしれませんが、時間がそれを解決することでしょう。

そしたら、一般の氏子崇敬者からみたその動画は、まさに祭です。

プロの目から見たら、あまりにもできすぎている見事すぎる祭式に逆に違和感を持つほどに丁寧な祭を目にすることになるでしょう。

祭を行う為の技術は完璧、体は映像とは言えそれを見事に見せることができる。正直非の打ち所はありません。

けど、A Iには決定的に欠如している物があります。

わかりますか？

技・体、それがそろっても、どうやっても手に入らない物。

そうです。心です。

A Iは心を理解することも心あるように見せることもできますが、心そのものはありま

せん。

それっぽい物をもっているように見せることができる。それも結局は「情報」にすぎないので。

だから人より「心」についての情報は多く持っているから、そのデータベースから「こう言ったら喜ぶだろう」ということを知っているので、コミュニケーション能力が高いんです。けど本当の心がないものに、本当に心を動かされることは無いと思います。

私は、技術が体を動かすのでは無く、技術によって心が奮い立ち、その心によって行動をする。それが祭に限らずあらゆる人らしい行動だと思います。

真に心から神社に祈りを捧げる人がAIの祈祷で満足できるはずがありません。見た目にごまかされるはずはないと思います。

けれども、実際AIの進歩はどこまで行くかわかりません。だからせめて我々しか持たないこの心を磨くことが、AIに仕事を取られない、AI神主を認めないための手段だと思っています。そして祭式とは技術であり、心を表すための最低限の作法であります。心がこもっていたら祭式を知らなくても祭ができる、というのは間違いです。

AIを使っちゃいけないというわけではありません。心の介在する必要の無い事務作業

などに活用するのは、人手不足の神社界には渡りに船となることでしょう。ですが心が介在する部分を担えるからこそ神主であると、私はそう言いたいわけです。

先程来申し上げている Instagram ライブ配信は、日頃から私の祭式を人に見られることで研ぎ澄ませ、決して妥協すること無いようにするため行っています。決して一方通行の配信ではありません。AIほど完璧な祭式はできなくても心を込めた可能な限り良い祭式作法で祭をすることを心がけ、いついかなる祭や祈禱においてもご参詣のみなさまに安心していただくために行っております。

改めて申し上げます。本日も心を込めてお祭りをご奉仕申し上げます。

どうぞ皆様が安心してお参りができる日々がいつまでも続きますよう、私もたまぬ努力を続ける所存ですので、これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

本日はようこそお参りでした。

(兵庫県 駒林神社 宮司)

## 神道講釈 本居宣長傳

岡 部 和 久

五箇条の御誓文からご維新を迎えた江戸は帝都東京と名を変えて天子様がやってくる空前の神道ブームがやってきました。それまでは忠臣蔵を中心としていた江戸文化も楠木正成・天誅組等の神道講釈師が雨後の筍のごとく現れてきますが、やがてトーキーの時代を迎え絶滅してしまいました。難しいお話を解りやすく面白い神道講釈を本日は本居宣長傳にてお時間までお付き合ってください。

「講釈師見てきたような嘘をいい」ちよつとほんのちよつとですがオーバーに話しています。もっとも妻には「おまえ見たんか？」といつも言われていますので、皆さんはしっかりお聞き頂き後で調べてください。

神道を学ぶ後輩に「本居さんはどんな人？」と聞くとお医者さんで、国学の大家で古事記伝を書いた偉人だと答えます。また和歌の優れた方で、毎回研修で教わります。そんな

本居さんの半生を楽しくお聴きください。

昭和を代表する批評家の小林秀雄はニーチエを書いたあとで絶筆となる『本居宣長』に取り組みます。分厚い上下二冊です、昭和の思想家丸山眞男は「これを読めるは我一人」と言ったとか、大体どんな本かは伝わってききましたと思います。

小林秀夫は冒頭で折口信夫の言葉を書きとめています。「小林さん、本居さんはね、やはり源氏ですよ、ではさようなら」。冒頭はこれ一言です。これは無茶苦茶わかりやすく言いますと「あああ！」人生に絶望した一言と、男女の営みの「あああゝん」も同じ事なのだと本居さんは言っています。「もののあわれ」と本居さんは言うのです。江戸時代は儒学が盛んで、男は人前で泣くものでない。師匠の賀茂真淵は「益荒男振り」と言います。しかし本居さんは男女とも「手弱女振り」がいい、感性が鋭く感受性が豊で強さを内に秘めた弱弱しさを自己演出できる人がいいと言います。ではその本居さん、どんな青年時代を送っていたのでしょうか。

松阪の商家に生まれた宣長さんは、本ばかり読んでいる少年で、お母さんはこの子は医学をさせて身を立てるしかないと考え京都に留学させました。ところが宣長さん、医学よりも堀景山という有名な儒学者の住み込み弟子になります。京都での生活は楽しくて毎日

がお祭りみたいな物見遊山の毎日で、宣長さんのお母さんは手紙を書いて今も残っています。「酒を飲むたびに親不孝していると思え、三本以上の酒は飲むな。母は松阪からみているぞ」

ですがそんな宣長さんも恋をします。師匠の手紙を帰郷の途中の津の儒学者に届けた時にその妹に恋をしました。一回り年下の十五の娘 乃木坂のセンターの女の子によく似ている。知らんけど。京都に來たのは医学を学ぶ為、しかし一切身に入らず学問三昧でしたので、急いで医学を修め帰郷しますが、その恋しいお民さんは既に嫁いだ後でした。仕方なく別の方と結婚しますが、待っている間にお民さんが離縁して戻ってきていると聞き、三月後には所謂三行半を書き離婚します。そしてお母さんの名前の「かつ」に改名します。本居さんの仕事はお医者さんと私の後輩は言います。お医者さんは尊敬され、お金も沢山稼ぎますよね。診療と投薬は今では別ですが、当時の診療は無料で投薬でお金を頂きます。本居さんのお仕事を今で言えば小児科専門の薬剤師ですね。本居家は裕福でなく、その上に夜な夜な近所の旦那連中集めて講義している。貧乏しているのに金も入らないことをしているのは道楽に思えたのでしょうかね。お民さんは字を書けたのに店の大福帳には文字がありません。その上、その後息子「古事記伝」の木版を作っていた時に盲目になっ

てしまいます。お民さんは本居さんの仕事を心から応援されていたのでしよう。

そんな本居さんに人生最大の転機がやってきます。そう戦前の教科書に載っていた「松阪の一夜」で賀茂真淵と出会います。「古事記」を研究したいという本居さんに「私も古事記をやりたいが年を重ねすぎた。大事なことは万葉集に学び当時の人の心をするにとだ」とアドバイスを頂きました。

これが本居さんに決定的な転機をもたらし、その後の研究を形づくります。ですが二人は何度も衝突をして膨大な和歌を送り「便所の紙の役にもたたない」破門と言われても本居さんは一向におかまいなしで送りつけました。

三度破門されても懲りない本居さんですが、真淵も「古事記」研究の為に祝詞や宣命という天皇の言葉から研究された事はほめています。宣長さんは古事記伝を完成させるのに三十二年かけて完成するのですが、最初の一行目で二年かかります。「神代一之巻」の冒頭、「天地初発之時、於高天原成神名……」この天地の読み方と「成る」のお話は時間となりましたので、また次にさせて頂きます。神道講釈本居宣長傳青春期の一節でした。

本日のご静聴ありがとうございます。

## 松尾祭 — 神様を担ぐということ —

進藤恵太郎

皆様こんにちは。本日はこのような機会を頂き、ありがとうございます。今日は松尾祭と神輿、そして神輿を担いできた人々——氏子の皆さんの思いについて少し考えてみたいと思います。

京都には長い歴史の中でたくさんのお祭りがございます。その中でも松尾大社の松尾祭は特に古くから続くお祭りの一つとなっております。いまから千三百年ほど前、奈良時代の記録にもその存在が見え始めまして、平安時代には京都三大祭りの一つに数えられる上賀茂神社下鴨神社の葵祭とともに大切な行事とされてきました。

さて、松尾大社が祀る神様というと大山咋神。もう一柱おりますがここでは割愛させて頂きます。大山咋神は、松尾山や比叡山に祀られる山の神様、また秦氏が京都市西一帯を開拓したということもあり、洛西の総氏神として、特にお酒造りの神様として全国的に広く

知られているところでございます。この神様が毎年春、当社にはちょうど山吹という黄色いお花が満開を迎える頃、神輿に神様が乗って氏子の町を巡られます。それが松尾祭・神幸祭です。四月二十日以降以後の第一日曜日に行われ、古くは「松尾の国祭」と呼ばれ、氏子が神様を迎え入れるという意味から通称「おいで」と呼ばれています。その神幸祭の三週間後の日曜、御旅所から神社に神様が帰ってくるお祭りのことを還幸祭といい、神輿をはじめ、奉仕者全員が葵と桂を使用するので「松尾の葵祭」通称「おかえり」と呼んでいます。この両祭、神様が町にお出ましになるというのはただの行事ではありません。私達の暮らしに神様が寄り添ってくださる。いわば、とても大切な信仰のかたちであります。

そしてその神輿を実際に担いで支えているのが氏子の皆さんです。神輿の両脇に長く伸びている棒を「轎」と呼んでいます。この轎を担ぐ人たちを通称「轎下」と呼びますが、その轎の下に身をかめ肩を入れ、神様の御魂を乗せた神輿を「ホイット、ホイット」の掛け声とともに担ぎます。ここで一般的に担ぐ掛け声については全国的に多いのが「平担ぎ」で「ワッショイ」次いで、「江戸担ぎ」で「エッサ」と言いますが、当社の神輿は独特で「ホイット、ホイット」と言います。シーソーのように激しく神輿を揺らし、鳴鑼という金具を鳴らす、勇壮で華やかな担ぎ方を致します。

ある轅下の方がこう仰っておりました。「神さんを担いでるんとちゃう。こつちが担がせてもろてるんや」担ぐという行為そのものが神様への信仰であり、その真心に触れる時間なのだと気付かされました。

ただ、その神輿の巡幸も時代の流れの中で何度も中断や変更を強いられてきました。例えば、昭和十七年。戦争末期、京都にも空襲の恐れがあり、神幸祭はやむなく十二日間の延期となりました。当時、町には緊張と不安が満ちていて祭りどころではなかったのかもしれない。けれど、神様への思いは絶えませんでした。「また、神様をお迎え出来る日が来ますように」と。その思いが戦後、日本が敗戦した直後であってもお祭りの復興に繋がっていたのだと思います。そして、私達の記憶にも新しいのが新型コロナウイルスの流行でありました。令和二年から、松尾祭の巡幸は中止や縮小が続きました。神輿や船渡御は行われず、代わりに唐櫃に御魂をお遷しし、トラックに乗せて町を静かに巡幸することとなりました。いつものような賑やかな掛け声や町衆の賑わいはありません。けれど、そこにあったのはやはり「神様が来て下さる」という思いでした。かたちが変わっても神様を迎える気持ちは変わらない。その思いを支えていたのも氏子の皆さんの真心だったのだと思います。

そして令和五年、ようやく神輿の巡幸が本格的に復活致しました。町には再び「ホイット、ホイット」の掛け声が響きわたり、神輿の鳴鑼の音が鳴り響きました。しかし、その年の還幸祭、やはり復活初年度でありましたので警察との交通整備の調整が上手くいかず神輿が神社に還御するのが大幅に遅れるという出来事が起こりました。

お祭りというものがただ伝統や通例で成り立っているのではなく、地域や社会の多くのご協力によって成り立っているということ。その調和が難しいものであったことを私たちはそこで改めて知ったのかもしれない。

令和七年、今年はというと六基の神輿を三グループに分け、二個一で巡幸する方法で合理的な交通整備を促すことにより、従来通りの時間に帰ってくることが出来ました。轅下が一年間温めてきた神輿の集大成となったことと嬉しく思います。

これは余談ですが、年に数回、轅下の皆さんと直会（懇親会や忘年会等）の機会があるのですが、最後締めめの挨拶替わりにこれもまた独特で机をみんなで端に寄せて、一人が空いた一升瓶を鳴鑼に見立て、「ホイット、ホイット」の担ぐ動きをします。一升瓶をバトンに一人ずつ繋がれます。これがお祭りさながらに盛り上がり、一人また一人と渡されていくその様を見て、神輿担ぎの勇ましさと思いの伝統に驚かされる次第でございます。

話を戻しますが、現在あきらめずに続けていこうという思いが、あちこちで芽吹いています。例えば、地域の子供達による「子供みこし」など子供の頃から神輿に触れる機会を設けています。神輿の轎の下に肩を入れるという体験は単なる「祭りの賑わい」ではありません。そこには神様と町の氏子を繋ぐ、という目に見えない祈りのようなものが宿っているように思います。そしてその思いを次の世代、さらに次の世代へと手渡していく。それは、松尾祭という神事を越えて「神様とともにある暮らし」を受け継いでいく営みではないでしょうか。松尾の轎の下には、ただ木の棒があるものではありません。そこには受け継がれていく神様への敬意と地域を代表して支える誇り、そして、人と人とを結ぶ温かな心がしっかり通っているのだと思います。氏子地域、特に西七条の地域は何世代と渡って同じ場所に生まれているご家庭が沢山ありますが、いつかその轎の下に今の子供達やまだ見ぬ氏子達が「自分も担ぎたい」と思ってくれるようお願いながら、今日の話を終わらせて頂きたい思います。本日はご静聴、誠にありがとうございます。

(京都府 松尾大社 権禰宣)

# 潮満珠と潮干珠

しおみつたま

しおひるたま

## 伊賀昇三

皆様、こんにちは、鹿兒島神宮禰宜伊賀昇三でございます。

演題は「潮満珠しおみつたまと潮干珠しおひるたま」鹿兒島神宮のご神宝のお話でございます。

昨年の講演講習会では、鹿兒島神宮のご祭神彦火火出見尊、別称、山幸彦命が、お兄さんの海幸彦命から借りた釣鉤を無くしてしまい、海の神様、綿津見大神が納めます竜宮城に行きまして、見事釣鉤を見つけて、無事地上に帰って来た、その帰って来たところが鹿兒島神宮の始まりであるというお話を致しましたが、今日はその続編、鹿兒島神宮のところに山幸彦が帰って来た後のお話を致します。

さて、話を少し巻き戻しまして、山幸彦が釣鉤を見つけて愈々この地上に帰ろうとしましたら、それはもうたくさんの方々、綿津見国の住人達、鯛やヒラメ、蛸やイカ、更には

妃になった豊玉姫を始め、そうそうたる姫様がずらりと勢揃い、別れを惜しみ盛大なるお別れのフェスティバルが開かれました。

別れに際し、綿津見の国の大王綿津見大神から、珊瑚や翡翠、真珠などたくさんのお土産をいただきました。そして愈々帰る間際に、綿津見大神は山幸彦に、釣鉤を返す時には、お兄さんを少し懲らしめてやりましよう、その方法を伝授いたしました。「婿殿、釣鉤を返すときは呪文を唱えて渡すのじゃ、すなわち大鉤おほち、踞鉤すすのみち、貧鉤まちち、癡鉤うるげぢ、（にぶくておろかで、よく魚を獲らない鉤）と言つて、後ろ手で投げつけてやるんじや」

更に潮満珠しおみつたまと潮干珠しおひるたまという二つの珠の宝物を渡しました。「よいか、この珠の使い方は、兄さんが田んぼを高いところに作つたら、婿殿は低い所に田んぼを作るんじや、そして兄さんが低い所に田んぼを作つたならば、そなたは高いところに田んぼを作るんじや、田んぼには水が不可欠、私は水を司つておるので自在に水を操ることができるのだ、この二つの珠を掲げて見るがよい、私が婿殿をお助け申そう」

かくして、山幸彦は三年ぶりにこの隼人の地に帰つて参ります。帰つた来た所が、毎年鹿兒島神宮の秋祭り「浜下り神幸祭」で御神輿さんが行かれます、鹿兒島神宮から五キロメートル程下つた、桜島を目前に望む白砂青松の美しい錦江湾の砂浜、今は隼人漁港のお

隣、鹿兒島神宮御旅所の所に帰って来たわけでございます。

さあさあ皆様お立ち合い、山幸彦の復讐が始まります。海幸彦は山幸彦がいなくなつて、なしのつぶてで三年が経っておりますから、もう怒り爆発、かくして山幸彦は「大鉤<sup>おほち</sup>、<sup>まち</sup>貧鉤」と言われた通りに呪文を唱えて後ろ手で釣り鉤を返します。更に田んぼも上を下を  
と作り替えます。

海幸彦は漁や稲作が上手いかなくなり、どんどん、どんどん貧しくなつていきました。反対に山幸彦の方は栄えていきます。海幸彦は頭にきて山幸彦を攻め立てます。攻めたてられた山幸彦は綿津見大神からいただいた潮満珠を掲げます、するとどうでしょう、たちまち海から大津波、潮がどんどんどんどん満ちて来ます、海幸彦はたまらず溺れてしまい、山幸彦に助けを求めました、そこで山幸彦は潮干珠を掲げると潮がみるみる内に引いていきます、海幸彦は命からがら助かります。するとまたまた海幸彦は山幸彦に攻めかかります。山幸彦はまたも応戦、潮満珠を掲げます。海幸彦は今度も「参った」と言います。山幸彦は再び潮干珠を掲げ潮を引かせます。そんなこんなを何度も繰り返し、とうとう海幸彦は観念して山幸彦に降参し、以後、山幸彦に従い大和國の礎を作ること貢獻された言  
うことでございます。

海幸彦は鹿児島神宮のふもと、隼人の人たちの祖先であると言われております。山幸彦はこの地に高千穂宮を創設され、長くこの地から世の中を治められました。やがてこの地が海幸彦こと彦火火出見尊をお祀りする鹿児島神宮となった訳でございます。

【さて物語をもう少し深読み致しますと、山幸彦が竜宮城に行ったという話、実際に海の中に入り込みましたら、息もできませんから亡くなってしまうです。これは水平線の彼方へ、船が消えてしまったということが、海の中に入ったように見えたと考えましたら、海の彼方、海の神様がいるところへ行つたと、考えましたら、その当時太古の昔、海の神様をお祭りする総本宮は福岡の国宝金印「漢委奴国王」の志賀島の志賀海神社、そしてそこをお守りしていたのがその当時、今という海上自衛隊の幕僚長、海上保安庁長官、水産庁長官等、海の関係の事を一切総括していたのが阿曇族であり、そこに若者がたどり着いて、信用を得てお嫁さんもいただいて、一軍の兵を引き連れて帰って来た、そこに三年という時間が丁度良い期間であらうと思われるのです。その証拠に志賀（鹿）の館があったところが鹿屋、志賀（鹿）の子孫が栄えたところが鹿児島というふうに名前が付いたものとも考えられるのですが、まあこれは私論でして、鹿児島では桜島を昔は鹿児島と言つて

いてという論が主流ですが、これも根拠は無いのですが、今日は時間の都合でこの話は割愛いたしますが。」

鹿兒島神宮のご祭神、彦火火出見尊山幸彦は、その父瓊瓊杵尊からは、天照皇大神の孫で高天原から続く大宇宙、天の神様のパワーをいただき、母木花開耶姫からは、その父大山津見神から続く、山を始め地球上のありとあらゆる大地のパワーをいただき、妻豊玉姫が父綿津見大神から大海原のパワーを持ってこれ、空と大地と海と、その当時地球上にあるありとあらゆる全てのパワーが結集し極まったところが、今、皆様方がお座りいただいておりますこの鹿兒島神宮、この場所であり、この力強いパワーが、この後そのお子神様鵜戸神宮の草葺不合尊、そしてそのお子神様が宮崎神宮の神日本磐余彦尊、神日本磐余彦尊が宮崎からお船出されて奈良の橿原宮で初代神武天皇として即位され、令和の今、今上陛下で一二六代目の天皇陛下となる訳でございますが、一二六代続いたそのパワーの源、パワーが極まったところがこの鹿兒島神宮なのであります。

それともう一つ、今日のお題であります、鹿兒島神宮のご神宝「潮満珠と潮干珠」この二つの意味するところ、これは潮の満ち引き、もうお分かりだと思えますが、古来より日

本では満潮の折には子供が産まれ、干潮の時に人は亡くなると言われております。この満潮干潮を操っているのが山幸彦の潮満珠潮干珠二つの宝珠なのでございます。つまり彦火火出見尊は人の命、人の生き死にを預かっているということかもしれません。

今日こうやってお参りされたことも何かのご縁でございます。一生懸命にお参りいただき山幸彦命の大空と大地と大海原の全知全能のお力をいただき、更に潮満珠潮干珠の命の御利益をいただきまして、より健康に、より息災に、命長くお過ごしになりますよう心よりお祈り申し上げまして本日のお話しはおしまいとさせていただきます。

誠にありがとうございました。

#### 参考文献

岩波書店 日本古典文学大系 日本書紀 上

(鹿児島県 鹿児島神宮 禰宜)

# 遷御の儀に奉仕して

塩 崎 昇

令和十五年秋、第六十三回神宮式年遷宮が行われます。今年は遷宮元年。いよいよ今年から式年遷宮に向けてのお祭りや行事が始められ、着々と準備が進められてゆきます。今日皆さんにお話しするのは、今から三十二年前 第六十一回神宮式年遷宮、遷御の儀での私の体験談です。

まだまだ駆け出し、神職になって四年目の私が仰せつかった所役は「前陣宮掌」といいます。遷御の御列の中心はご神体を奉持する大宮司、少宮司、禰宜、その姿が外から見えないように行障、絹垣という絹の白いとぼりで周囲を覆います。その前をゆく御列を前陣、後ろに続く御列を後陣といいます。前陣宮掌とは、遷御の列の先頭を左右二名の神職で先導する、いわゆる先導所役です。御列が進むスピードを決める役にもなるわけですから、大きな責任を感じました。

平成五年十月二日、内宮の遷御の儀の当日はとても良い天気でした。夜空には満月がこうと光を放って輝いていました。大勢の奉拝者に見守られて参進をしてから約一時間半、いよいよ正殿の御扉が開かれるときがやって来ました。正殿のある内院の御垣内は炎の勢いを抑えたわずかな庭燎の灯りと、正殿の御階の両端に据えられたかすかな燈明の灯りしかありません。そのかすかな灯りのせいで、目の前の大きな正殿の姿が黒い影となつて目の前にそびえています。私たちは地面に敷かれた莫蔭に正座し、正殿の黒い影を見上げています。やがて御扉が開く拍子木の合図を聞いて、地面に伏します。大きなギイという御扉を開く音。再び合図の音で体を起こします。目の前には御扉が開かれた正殿の黒い影、さらに見上げると群青色の夜空に満天に星たちがキラキラと輝いている。とても美しい光景でした。

私はそのとき、とても不思議な体験をしました。御扉から陽炎のようにメラメラとした大量の空気が、夜空にわき上がってゆくのです。これは、見えてるわけじゃないのです。目をそらして隣の同僚の顔を見ても無表情、同じものを見ていると感じませんでした。しかし、再び正殿を見上げると、またその光景が見える。いや、頭に浮かんでくるのです。夢でもないし、正気です。何度目をそらしても、再び見上げれば 同じ光景が頭に浮かん

でくるのです。まるで大御神さまの満ちあふれた靈氣が静かに漏れ出し、夜空に立ち上ってゆくようだと感じました。よく考えてみれば、夜に御扉が開かれるのはこの遷御の儀だけなのです。普段の開扉は昼間にしかない。夜のこの時間に開扉されるのは二十年に一度だけ、この遷御の儀の時だけなのだ。そう考えるとあまりの恐れ多さに身震いがしました。

やがて総員総立ちになり、いよいよ遷御の列を整えます。午後八時、城内の全ての灯りが消され、あたりは真つ暗になります。鶏鳴の声を聞いて、もう一人の前陣宮掌と歩調を合わせて、ゆつくりと前に進み始めました。正宮の外に出て石段にさしかかりましたが、目の前は全くの闇です。石段を降りた先には奉拝者がいる棧敷席が広がっているはずですが、かすかに見えるくらいで、一斉にたかれる赤外線カメラの緑色のにぶい灯りを見ながらゆつくりと階段を降りました。玉砂利を踏む音と雅楽の調べ、そして警蹕所役がとなえる「オー」という震えた大きな声が響きわたります。そして新宮に到着。私は御列から少し離れた場所から白い絹垣が提灯の明かりにだけ照らされ通り過ぎてゆくのを拝しました。入御された後は緊張もほぐれうれしさがこみ上げてきました。退下したのは午後十時を過ぎていたと思います。参進から四時間以上費やした大変なお祭りでした。

控え室に帰った後、新宮の南宿衛屋に控えていた二人の先輩からこんな話を聞きました。宿衛屋といえますのは、御垣内参拝の際、受付を行う神職の詰め所です。先輩たちは宿衛屋の前に整列し御列が新宮にやってくるのを待っていました。すると体に感じないほどの静かな風が吹いていることに気がついたそうです。新宮の外玉垣御門にかかる御幌みとぼりという絹の白いカーテンが一定の角度を保ち外から内側、つまり御殿のある方向に向かって、ふわりと浮かんたまま全く動かない。普段風が吹くと御幌はたなびくものなのですが、このときは一定の角度を保ったまま動かない。あまりに長時間つづくので、不思議な光景だなと思い二人でそれをジッと眺めていたそうです。やがて御列がやってきて平伏。御列が内玉御門をくぐって内院に向かう姿を見送ったあと、ふと気がつくと、今度は逆方向、内側から外に向かつて御幌が一定の角度を保ったまま浮かんでいたのだそうです。

先輩たちは「神風が吹いたんだよ！」と言いました。

そうです。神風です。あの遷御の夜、神風が吹いたのです。

私も御扉が開いたとき、漏れ出すような神気を感じました。それがきつと風となって新宮に向かつて静かに吹いていたのだ。そう思い、私は「ここには本当に神さまがいる」、自分が感じたあの光景と体験を興奮して先輩たちに話しました。

「ここには本当に神さまがいる」神気を放ち、静かな風を吹かせて、先ほど自分たちの目の前を通りすぎていった。そして、入御された後には、今度は私たちの方に向かって大勢の奉拝者の方に向かって、神風を吹かしてくださったのだ。驚きと感激のあまり涙がこぼれました。西行法師の

何事の　おはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるる　（二回）

「ここには本当に神さまがいる」四年目の駆け出しの神主。神さまの存在を疑っていたわけではない、「ここには本当に神さまがいる」この表現は神職として適切ではないと思うけど、本当に心の底からそう思いました。

「この伊勢の皇大神宮には　確かに　皇大御神さまがいらつしやる。」  
あの感動と感激が今の私のゆるぎない信仰心を支えてくれています。

（和歌山県　伊勢部柿本神社　宮司）

## 沖繩の慰霊

福田 友也

本年は新聞やテレビ等でも報道されております通り、終戦八十年の年でございます。皆様は今年に入り、戦争について考えたことがありますか。今回、私は沖縄における「戦争」や「戦没者慰霊」についてお話をさせて戴きます。ぜひ、私の話を聞いていただいて、「戦争」「戦没者慰霊」について考えていただけますと幸いです。

では、まずは沖縄戦についてご説明致します。大東亜戦争末期、沖縄県で地上戦が行われました。米軍は昭和十九年に沖縄攻略を正式に決定し、大規模な空襲を行いました。日本では同年に「防衛召集」という仕組みの改訂により、今まで十九歳からであった召集が十四歳から四十五歳までとなりました。これを「根こそぎ動員」と言い、代表例としてひめゆり学徒隊や鉄血勤皇隊があげられます。その後、米軍は昭和二十年、一五〇〇隻近くの艦船と約五十四万人の兵員をもって沖縄本島に上陸を開始いたしました。ここから、約

三から五ヶ月にわたる沖縄戦が始まりました。この期間で亡くなられた方々は、日本兵、一般住民、合わせて二十数万人と言われております。そして、この沖縄戦最後の激戦地が現在、平和の礎や各県の慰霊の塔がある、沖縄県平和記念公園、摩文仁の丘であります。

では、当時の方は戦時中、どの様な思いであつたのでしょうか。六月七日、平和の礎の前で戦争を経験された島袋安子さんが作られた「戦争華<sup>いくさばな</sup>」という琉歌を基にご説明をさせていただきます。この琉歌、八番まで歌詞がございまして、本来であればすべてをご紹介したいのですが、今回は、その中でも特に私が心に残った歌詞を紹介させて戴きます。まずは、三番の歌詞でございます。

父ぬ酒盃ゆ 聴ちよる母親ぬ 哀なしぬ姿

皆袖濡らち 皆袖濡らち

うやぬさかじちゆ ちちよるふあふあうやぬ ちりなしぬしがた

なすでいぬらち なすでいぬらち

戦争に行く父と兄が杯を交わし、そばで話を聞く母親が悲しんでいる様子を描いており

ます。また、五番では、

戦争世ん終てい月日ひ経てい居しが訪りん

無らん 大事息子 大事息子

いくさゆんうわてい ちちひひていうしが

うとうじりんねらん あたらなしぐわ あたらなしぐわ

戦争が終わって月日が経っても息子が帰ってこないと嘆く母親の姿が描かれております。

戦時中、本人、また、家族がどの様な思いであつたのかが伝わってくる歌でございます。SNS等実際に歌っている様子や、歌詞が出てきますので、是非、曲の全てを聴いて戴けますと幸いです。

さて、この様な悲惨な地上戦が行われた沖縄では、終戦八十年の本年、様々な行事が行われております。先ず、斯界では全国の神社や神社関係者が各県の慰霊の塔の前で、ご遺族の方々と一緒に慰霊祭を行なっております。慰霊祭で読み上げられる祭文には、沖縄戦

で亡くなられた各県の御英霊への追悼と感謝、そして、戦争のない平和な世の中が続くようにという祈りが込められております。

そして、何といひましても今年のビッグニュースは天皇后両陛下並びに愛子内親王殿下の沖縄来県でございます。皆様もニュース等でご覧になった方も多いのではないのでしょうか。御一家は今回、沖縄戦で亡くなられた戦没者の御霊をお慰めされる為に、沖縄県に行幸啓いただいております。御一家は、糸満市の沖縄平和記念堂、国立沖縄戦没者墓苑、平和の礎、県平和記念資料館等を訪問されました。戦没者墓苑では約二十名のご遺族お一人お一人とお話をされ、最後まで目を見て頂きながらお話をお聞きになられていたと宮内庁の方から聞いております。

その後の提灯奉迎では五千名を超える県内外の方々が黄金森公園に集まり、白提灯を持ち、陛下をお迎え致しました。これは裏話ではございますが、ご予約が遅れまして、ホテルへのご到着は奉迎の時間の直前でございました。しかしながら、奉迎の方々をお待たせしないようにと御到着直後にも拘わらず、御答礼に臨まれました。陛下がいかに国民を思い、沖縄を思っているのか、感じることでできる一幕でした。

この皇族の戦歿者慰霊を兼ねた沖縄行幸、戦後初めての来県は上皇陛下が昭和天皇の名

代として訪問された昭和五十年でございました。当時、皇太子殿下でありました上皇陛下はひめゆりの塔を訪れた日の夜に、「払われた多くの尊い犠牲は一時の行為や言葉によってあがなえるものではなく、人々が長い年月をかけてこれを記憶し、一人一人、深い内省の内にあってこの地に心を寄せ続けていくことを置いて考えられませんか」との談話を発表されました。この言葉の通り、沖縄へは格別のご高配を賜りまして、退位されるまでの間に十一回の沖縄行幸をなされました。そして、そのお気持ちは今上陛下へと受け継がれました。今上陛下は、この度の行幸の中で、この様に述べられております。

戦後八十年を迎える節目の年に沖縄県を訪れ、沖縄戦で亡くなられた方々や、戦争によって苦難の道を歩まざるを得なかった方々に思いを寄せつつ、平和の尊さを心に刻み、平和への願いを新たにしていきたい。

上皇陛下から今上陛下へとお気持ちを受け継がれたように、私も、戦争で亡くなられた方々に思いを寄せつつ、正しい歴史を後世に受け継いでいかなければならないと思った次第でございます。

最後に、上皇陛下の御製を紹介してお話しを締めさせて戴きます。

激しかりし戦場の跡　眺むれば平らけき海その果てに見ゆ

皆様も、終戦八十年の今年、穏やかなこの海のような、平和な日本がいつまでも続いていくよう、共に祈りしてまいりましょう。

(沖縄県 波上宮 出仕)

# 看取られる神社

山下 裕嗣

看取られる神社？なかなか格好良いタイトルですが、実は私の発想ではありません！

このタイトルの本に出合って、即購入し、読んでいく中で、いろいろな思いが溢れてまわりましたので、今回のテーマとしました。

私も兼任十三社の内、看取られそうな神社五社を兼務しております。既に氏子が去って不活動になった神社一社。既に氏子は去ったが、春秋のお祭りだけ元の氏子が来られて、お掃除や社殿準備をして、お参りがある神社が三社。まだ十戸ほどの氏子は居られますが、皆さんが後期高齢者であって、若返る可能性ゼロのお社が一社。まあ、それらに次の順番についている神社も一、二社ありますが……。

この本の作者は嶋田奈穂子さん。元々生活デザイン科の勉強をし、日本の在来工法としての神社建築に興味を持ち、「地域学講座」の教授について、各地の神社を訪れる中で、

主に神社の建物を研究されていました。しかし、どれも画一的ではほぼ同じということに飽きてしまつて、それよりも、海、山、島、池や川のほりだったり、神社の立地する風景が多様で、「なぜそこに神社があるのか」に大いに興味を持ったそうです。この本のサブタイトルは「変わりゆく聖地のゆくえ」です。本には、帯とか、腰巻きなどと呼ばれて推薦文が巻かれています。この本の推薦文は、民俗学者の赤坂憲雄さんが書かれています。

「神社とは何か。なぜ、そこにあるのか。」

「ムラが終わりを迎えたとき、神社を壊し、焼いて、更地に戻す。そうして、聖地の最後を看取る人たちと出会った。」

神社だけではなく、不活動になつてゐる宗教法人の数、令和四年の調査では三、三三九件。令和五年調査では四、四三一件。ナント一年で一千件も増加しています。まあこれは文化庁の方針が変わつて、「毎年の事務所備え付け書類の写しを出さなかつた法人を不活動とする」という基準になつたからであります。近年はおおよそ三、三〇〇～四〇〇の法人が不活動になつております。神社本庁では、吸収合併解散などを進めて、不活動法人を減らそうとしておりますが、数字が変わらないのは、合併し解散した数だけ、新たに発生し

ているということであります。

第一章は「聖地が生まれる」古くからある集落には必ずと言っていいほど神社が有ります。いつ、だれが、どんな目的で…。著者の嶋田さんは、そういつたことに興味を持ち、調査するわけですが、滋賀県にお住いの嶋田さんは琵琶湖周辺を調査することとなります。

まずは、守山市で野洲川の度々起こる河川の氾濫に、人柱となった娘さんを、明神としてお祀りした話。またその氾濫により農作物が育たないため、農業の神として祀られた稲荷神社の話。次は、場所は福島県会津地方のお話ですが、慶長年間の大地震（記憶に新しい東日本震災じゃないですよ！）で、大きな崩落があつて、飲み込まれた村に慰霊の念を捧げる遥拝式を、鎮守の祭りの後の行ったというお話。嶋田さんは、いろいろと調べられたものを本に書かれています。これらはご創建などの歴史が判明しているごく僅かな神社と言えるのだと思います。

神社名鑑などを見ますと、かなりの神社のご創建が「創立年代不詳」となっております。地方の氏神・鎮守の多くは、集落ごとの自然発生的に生まれた信仰なのだと確信しております。

神社の信仰の基本は稲作です。人々は命を繋ぐために田畑を耕し、日々作物の成長を願

うのですが、大自然の摂理の中、大雨のことも大風が吹くことも、日照りが続くこともあるわけです。大雨や日照りは高い天から、大風ははるか遠くの見えない世界から。それぞれやって来るのです。人々はムラの高いところから、または高い木を通して天の上の世界や遠くの世界に願うようになります。村の人々が集って祈りをささげる場所が、この本でいう聖地になります。ことある毎にそこに集って祈りを捧げるのですが、そんな時にも大雨が降ることもあったのでしょうか。人は祈りを捧げる時にも濡れないよう仮設の屋根をかけるのです。恒久的な建物ではなく、仮のものですので「屋」の「代わり」でヤシロ。神社の「社」という漢字の訓読みです。ことある毎に祈りを捧げて、良い結果が生まれると近隣の集落にも伝わるようになります。そうするとひっきりなしに祈りが捧げられる様になり、恒久的な建物「宮」。「御」「屋」が生まれるのです。何かの歴史的なことがらで生まれた神社であっても、自然発生的に生まれた神社であっても、少なくとも自分たちの祖先様が作られた大事なものであることは言うまでもありません。

話を「看取られる神社」に戻しますが、この本では神社を看取った老人の話も書かれています。福島県昭和村の山奥の又一さん。村を離れる人が続き、このご夫婦だけになった時、ご神体と言われる夫婦の御神像をまずは、博物館に預け、一人で神社建物を壊し、そ

の残骸をすべて燃やして更地に戻した後すぐに亡くなったとのこと。また越前市菅町の柳下さんの話も同様で、残ったご夫婦が更地に戻し、本では墓標と呼んでいる「菅八幡神社跡」の石碑を建てられました。後の章に書いてありますが、どちらも御霊代は別の神社に遷座されており、社殿などが残っていたそうです。

戦後、各地の神社は宗教法人となり、法律上の決まりの中で存在しています。不活動になった神社の多くは復興は難しく、どのようにして看取っていくかの試みも検討されるべき時代に來ております。

ただ御霊代の奉遷と、法人の解散合併だけではなく、そこ残る地域のご縁「地縁」を紐解きながら、その神社のご創建前の姿に戻して初めて終えられるのではないかと感じています。

(石川県 白山神社 宮司)

# 生きるとは

河 本 文 夫

先日、映画「タイタニック」の主演男優でしたレオナルド・ディカプリオがこのようにことを言っていました。

「日本人は恐ろしい民族だ、なぜなら彼らの九十九パーセントがキリスト教を信仰していないにもかかわらず道徳的で礼儀正しい社会を築いている」と。

この恐ろしいとは畏敬すべきという意味だと改めて、語っておりましたが、西欧では、人間の道徳、礼儀は宗教からくる。特にキリスト教からくると考えられているのです。

しかし我が国ではその道徳、礼儀、忠義とか、そのような教えはどこからきているのでしょうか？ 神道からでしょうか、仏教からでしょうか、桃太郎をはじめとする日本昔話からでしょうか、今の世の中にも漂っている江戸時代に完成した武士道からでしょうか。幼いころよくTVのゴールデンアワーに放映されていた水戸黄門、大岡越前といった時代

劇からでしょうか。

幸いに時代劇には、親の愛、孝行、夫婦の愛、家臣としての忠義、嘘をつくな、お天道様がみているという、神道・仏教の教えが落とし込まれております。

そういえば、私の家内は結構正義感が強いのです。幼い頃大岡越前をよく見ていたそうで、大岡越前は加藤剛でないとかね、言っておりますが、彼女の心の成長に大岡越前のTVドラマは大きく影響したのだと思うのです。

そんな、宗教からくる教えが無くて、日本という国に生まれ、絶望の淵に立たされたにもかかわらず、人として、人生に花を咲かされた方を紹介し私たちの生きる力にしたいと思います。

昨年の四月二十八日詩人の星野富弘さんという方が亡くなりました七十八歳でした。詩人であり、画家でもあります。でもその作品は、詩と絵を組み合わせた詩画と言った方がいいでしょうか、詩画作家と呼んだほうがいいのかもかもしれません。

しかしその作品は絵筆を口に咥え、その絵筆で、絵を描かれ詩を書いておられるのです。そうです首から下が不自由なのです。しかし彼の感性から紡がれる詩、絵がくつついての詩画が日本中で大変注目され、世界中でも高い評価を受けニューヨークでの個展の際には

行列ができたほどでした。

この方は群馬大学を卒業後中学校の体育教師とし赴任され、こともあろうに指導中怪我をされ頸髓を損傷されたのです。

頸髓損傷すなわち首の四番目と五番目が離れてしまったのです。

現代医学では細い神経は繋ぐことができませんが、首の骨の中にあるような太い神経を完全につぐことできないのです。

そしてこの事故の後、彼は首から下、手を動かすことも歩くこともできなく、ずっと寝たきりの状態になってしまいました。

実はこの全身全く身動きができないまま、九年間群馬大学医学部病院に入院なさいました。この入院中、彼は自暴自棄と言いますか、何が人生だ、何が幸せだ！ と随分屈折した精神状態であつたそうです。

そりゃそうでしょう、自分が一番得意なことが取り上げら、人生設計全部ゼロになったわけです。やりがい全部奪われてしまったわけですから、そんな彼が詩人となるべく力を与えてくれ、自分の心の変化を起こす二つほどの事件があつたということです。彼の本、「かぎりなくやさしい花々」に記されております。

その中から、本日は時間の関係でその一つを紹介しましょう。

その事件は彼が長い間この病室にいた時のことです。中学生のT君という男の子が入院してきました。お母さんの話によると非常に重い深刻な病気だそうです。しかし星野さんは元中学体育教師、T君は中学生です。そういう関係で、T君は星野さんに随分なついて、星野さんもこの中学生の前でしょんぼりしている姿を見せるわけにはいかないということで、ある意味で張り合って、二人はとってもいい関係でいたそうです。

しかし彼は治療のため東京の大学病院で最先端の手術をすることになり彼は結局転院することになりました。

親しい人がいなくなるっていうのは寂しいことです。彼がいなくなって、何かぼつかり穴が開いたなと思って寂しがつていたその時、彼のお母さんが白い帽子を持ってこられました。

その帽子というのは、T君が今からすごく難しい手術を受けるので、何か励ましの言葉を、この白い帽子にフェルトペンで書いてください。という依頼です、すでにいろんな言葉がびっしり書いてありました。

「忍耐」とか「頑張れ」とか「負けるなよ」とか「神さまは君を見捨てない」とか、入

院中の人が、親しくなった彼のためにエールを送っているのです。でも星野さんは首から下が完全に動かないのです。指も動きません。

しかし、どうしてもT君に励ましの言葉を送りたいと思って、生まれて初めてフェルトペンを口に咥え、白い帽子に描こうとするのですが、生まれて初めてのことでですから上手く書けません。

ようやく書けたのは白い帽子に黒い点をつけることだけでした。

点だけでは何だかよくわからない、それでその点の上に星野さんのお母さんがなぞるようにして富という字、富弘さんの富という字を書いて、その上にひらがなの「お」をつけました。これをサインとして書いて、彼に送りました。

しばらくしてT君から喜びの電話が来ました。

「星野先生不自由な体なのに、口にペンを咥えて書いてくれた、と聞いています。僕のためにこんな難しいお富と書いてくれてありがとうございます。僕は感激でいっぱいです。先生が頑張られるように僕も頑張ります」

あまりの感激の言葉を聞きながら、

「いや、あれ私が書いたのじゃないんだって言いそびれ、つい、うん頑張って書いた」

みたいなことをおっしゃったそうです。その後で嘘をついたということに良心の呵責を覚えられました。そしてあんなに自分のことを信頼して頑張って書いてくれたと思い込んでいるT君に対して嘘つきのまま終わりがたくない、

嘘つきの星野富弘で終わりがたくない。このことを嘘にしないために口に筆を啜えて文字そして絵を書く練習を始めたのです。

そう星野さんは、これが詩画作家として生きる原点なのです。

でもお母さんをはじめ多くの方々に支えられ星野さんが花開いたのも事実です。

その本の中に星野さんがこのように

「神様がたった一度だけ この腕をうごかしてくださるとしたら 母の肩を たたかせてください……」

「神様がたった一度だけ この腕をうごかしてくださるとしたら 母の肩を たたかせてください……」 っと。

ご清聴ありがとうございました。

## 武士道と云ふは…

小倉雄大

大谷翔平選手が目覚ましい活躍をされています。海外では「ユニコーン」や「ショータイム」などの有名なニックネームの他にも、投手と打者の「二刀流」であることや、ゴミを拾う姿などの礼儀正しく紳士的な振る舞いから「サムライ翔平」とも呼ばれているそうです。

また日本代表のスポーツチームの愛称に「侍」と付くことがよくあります。野球は「侍ジャパン」、サッカーは「サムライブルー」、ラグビーは「サムライズ」、ホッケーは「サムライジャパン」。猫も杓子も皆「サムライ」。野球とホッケーに関してはもう少しやりようがあった気もしますが、みんなサムライが大好きなようです。日本を象徴するものは他にも「忍者」や「富士山」など沢山ありますが、「シノビジャパン」や「ふじやまジャパン」ではなく、やっぱり「サムライジャパン」なのです。

そこである疑問がわきます。日本人は何をもってサムライだと考えているのでしょうか。よく日本人は、規律を守り、礼儀正しく、ひたむきで、忍耐力があると言われます。確かにこれらは一般的に想像される侍の特徴にも当てはまるように感じますが、それは日本に限らず世界中で普遍的な美徳とされており、それだけでは「侍」とは言い切れないように思えます。

侍、武士の精神的な在り方を「武士道」と言います。武士道と聞けば、なんとなくのイメージはつきますが、それを言語化するとなかなか難しいものです。

私は大学生時代、武家の古文書などを読み解く、通称「武士道ゼミ」と呼ばれるゼミに所属しており、武士道について少し学んでおりました。そこで今日は日本人として皆さんにとっても馴染み深く、けれどもなんだかよくわからないそんな武士道のお話をさせていただきます。

早速ですが結論から申します。「武士道とは何か」という問いに対する答えともいえる一節があります。それは江戸中期に佐賀藩士・山本常朝<sup>つねとも</sup>によって著された「葉隠」の冒頭

に書かれています。

「武士道と云ふは、死ぬ事と見付たり。」

唐突な危険思想に会場が引いているのを感じます。今の世でこんなことを言ったら、各方面から袋叩きにされそうですが、これはとても有名な一節ですので、ご存じの方も多くいらっしゃるかと思います。

これを聞いて「死ぬこと」を賛美しているように捉えられるかもしれませんがそれは誤解です。確かにこの一節だけを切り取ると、そう思われる事も無理ありませんが、次にはこう続きます。

「二つ二つの場にて、早く死方に片付ばかり也。別に子細なし。胸すわつて進む也。」これを意識するようになります。

「例えば、一方は命を落としてしまう危険が高い道、一方は逃げのび生き長らえる道があったとして、武士ならば迷わず死の道を選ぶこと。そうすれば物事は早く片が付く。覚悟を持って突き進みなさい。」

さらに内容はこう続きます。

「人は誰しも生きることが望む。だが、戦から逃げ、もし逃げ伸びたとしても腰抜けと

汚名を着せられる。一方、決死の覚悟を決めた者は、例え危機に瀕しても冷静であり、覚悟の無い者に易々と負けることはない。万が一死んでしまったとしてもそれは恥にはならない。これが武士道の根幹である。常に死を思い行動すること。」

つまり、いつ何時命を落としてしまうかもしれない武士の世界で、「今日が最期の日になっても構わない」と、常に決死の覚悟を持つことで、逆説的に武士として、また人間としての有意義で誇り高い生き様について述べているのです。

武士の他にも、西洋には騎士、現代には軍人など、命懸けの職業は様々あります。しかしそれらと決定的に違うのは、武士道には神道や仏教の思想が備わっている点です。

国外に武士道の価値観を広めたことでも知られる新渡戸稲造氏によると、まず仏教は輪廻という概念や様々な教義によって、生と死、即ち命との向き合い方を教えました。

そして神道は、自然崇拜の思想を通して、自分もそこに生きる命の一つであり、周囲に対する謙虚さや国土を愛する心を育みました。さらに、命を与えて下さった親や祖先に対する敬意をもたらし、代々受け継ぐ家の名を上げること、そして家族を守ることを尊ぶ心を育んだとしています。

恥をさらすことや卑怯な手を使うことは家の名を汚すことであり、仮に戦から逃げたり、万が一にも犬死などしてしまったりしたら、自分の守るべき家族が危ぶまれてしまいます。さらに忠義を尽くさず、謀反者と見なされれば、先祖代々守り、子孫に受け継ぐべき家を取りつぶしとなることさえあります。だから武士は命懸けで忠義を尽くし、家や家族の安全を守ることを大切にしました。自分の命であつて自分の命ではなかったということです。

また大谷選手の話に戻りますが、彼は自分のパフォーマンスを最大限に上げるため、野球や仕事以外の時間のほとんどを睡眠時間に費やすといえます。それはまさに、野球に人生全てを捧げていると言えます。

大谷選手だけでなく、多くの日本人選手は、スポーツを通して、日本に夢や活力を与えたい。と語ります。自分の功績を上げることとはもとより、世の為人の為に自分以外の誰かのために身を粉にして力を尽くす姿はまさに侍と重なります。だからこそ「侍ジャパ」なのでしょう。

我々はもちろんスポーツ選手でもましてや武士でもありませんが、この滅私奉公の精神

の尊さを自然と理解することができます。ですから日本人の心の中には今なお武士道精神は息づいており、日本人即ち侍という安直なイメージもあながち間違いではないと私は考えています。

今日は武士の生きざまについてお伝えするうえで「死」について語りました。現在の平和な我が国では、命懸けで何かを守るということはあまりありませんから、武士と比べる「死」というものは縁遠いもののようにも思います。しかし誰しもいつか必ず命の終わりは来ます。「何のためにどのように死ぬか」を考えることは同時に「何のためにどのように生きるか」を考えることと同じことであることと先ほどお伝えしましたが、それは我々現代人にとっても重要なことです。

豊かさとはなんでしょうか。車や時計、宝飾品。お金をかけて手に入れる物質的な豊かさは確かに煌びやかにみえます。それらを追い求めるのも一つの幸せの在り方だと思えます。けれどもはたしてそれらに命をかけて守るほどの価値があるでしょうか。

それよりも、命を懸けても人生を懸けても守りたいと思えるようなものが、私にはあり

ます。皆さんもきつとそうでしょう。家族や恋人、自分の信念、そして国家。人によって大切なものは異なりますが、それが多ければ多いほどの人生の幸福度は増し、武士のように大切なもののために、命をかけ、人生を捧げ、力を尽くすことこそ、本物の豊かさだと私は思います。

ご先祖様からいただいた限りある大切な命をいたずらに消費してしまうのか。或いは世の為人の為に力を尽くし、価値あるものを後世に残すか。それを選ぶのはあなた次第です。さあ今こそ、取り戻しましょう。侍魂を。

(三重県 椿大神社 権禰宜)

# しきたり・文化

佐伯正則

延暦と云う時代に書かれた書物にも皇太神宮のたいは太いという字になっています。

日本には「言霊の幸はう國」と申しまして古来より言葉を大切にしてきました。

事実、励ます言葉もあれば、刃物で切られるより痛い言葉もあります。

そして言葉を伝える手段として、漢字、平仮名等があります。

これをもちまして春の大御祭滞りなく終了しました。

本日の講話としまして、しきたり・文化と云うことで御話させて頂きます。

太田さん、大橋さん、大川さんと、苗字がありますが、太田さんだけが大きいでは無く、太いと云う字を多くの方が使っておられます。(高岡市電話帳では大きい大田さんが九軒、太い太田さんが七十九軒) 何故でありましょうか。

この一幅の掛軸は古い家柄、旧家の所蔵ですが拝見した時、直ぐに江戸時代以前の物と判りましたが、なんと七百年前の南北朝時代、北朝方皇子の筆と聞いて驚きました。

「なんでも鑑定団」行きの代物です。三つの神社の教えが書かれています。

真ん中は天照皇太神宮（三重県、伊勢の神宮）。次に八幡大菩薩（大分県の宇佐神宮）、最後に春日大明神（奈良県、春日大社）と記されており。

ここに書いてあります伊勢の神宮の教えを御紹介しますと「謀計（悪だくみ）は眼前の利潤たりと云えども神明の罰に当たる。正直は一旦の依怙に非ずと云えどもついには日月の憐みを蒙る」正直の大切さを説いたものです。

私が注目したのが「太い」と「大きい」です。真ん中の伊勢の神宮だけが太いになっています。太いは大きい何倍も何十倍も大きく「唯一無二」の存在であり、左右の御宮と更に差別化を図った訳です。

年末に皆様に御頒ちしている伊勢の神宮の御札、神宮大麻にも「天照皇大神宮」と書かれており、江戸時代までは大きい神宮では無く太い神宮でした。

何故大麻、大きな麻かと云いますと御札には植物の麻が封入されているからであり、先ほど皆様を御抜いた大麻にも必ず麻が付けられています。

「麻の中の蓬」麻は真つ直ぐに成長します。ですからあの曲がりくねった蓬でさえ、麻と一緒に居れば真つ直ぐになるとの例えです。真つ直ぐな心を我々は理念としておりますから、麻は神社にとりまして一番大事な草となりました。

神宮大麻は室町時代頃より伊勢の神宮の神職により、全国津々浦々に頒布され、江戸時代には全国の八割程度が御札をうけておられたそうです。

神宮の神職、御師は地方の有力者を「檀那」と呼び、旦那の初見とも云われております。我が富山県は神宮大麻の頒布率全国一を四十数年間続けて参りました。

これも一重に一重に氏子皆様の伊勢の神宮の尊崇、ひいては神社に対する信仰心の篤さと、御宮を預かりし者として深く御礼をもうしあげます。

江戸時代までは大きいでは無く太い皇太神宮でした。

しかし現在は天照皇大神宮、太いが大きいになっています。

私が掛け軸を拝見して江戸時代以前と推察したのも明治政府が「太」から「大」に変更した事を聞き及んでいたからです。太いは儒教色の強い字と云う事で、国家神道を目指し、他の宗教と分離したい政府は太いを排除し、現在に至っているのです。

されど此の小さな文化は太田さん、太い田圃により脈々と生き続けました。

お米は日本民族の精神の根幹を成すものだと言われてきました。

お米、田圃は一人では作れません。皆で力と心を合わせて、自分の我を抑えて作ってまいりました。自分への戒めとして「我田引水」の言葉も生まれました。

田圃を作っている事の誇りを、唯一無二の太い田で表されたのでは、ないでしょうか。

しかし昨今この皆で力と心を合わせての精神が希薄、薄くなっていると感じるのは私だけではありませんか。

明治五年に太いから大きいに政府は変更しましたが、平成二十五年の「第六十二回神宮式年遷宮」の際には神宮の御印「太一」が普通りの太い「太一」に戻りました事を有り難く思っています。

本丸に一步近づきました。

遷宮とは二十年に一度、御宮を作り替える一大行事でありまして、平成二十五年では五百五十億円を超える金額を費やしました。

本殿近くを御覧ください。小さい神棚が奉安されておりますが、あの中には六十二回遷宮に賛同された御一人御一人の御名前が記載された名簿が入っております。

富山県は目標金額に対して皆様の御蔭で二倍以上の御浄財を納めることが出来ました。

令和十五年に六十三回の遷宮が行われる事となり、最初の御祭りが本年五月に厳肅に斎行されました。

皆様方におかれましては前回同様の遷宮への御賛同を高い席からではありますが、切に願います。

昭和の政府もしきたりを変更して国旗の掲げる位置を左から右としました。

神社新報の記事によりますと、内閣通達において欧米に倣って左より右に変更しました。明治のあの外交の苦しい時にも変更しなかった掲げる位置を、いとも簡単に変えてしまったのです。日本と中国には、左が貴い、左貴思想と申しまして左が右より上位という考えがあります。

出雲の大社、出雲大社の御祭神は大国主の尊、大黒様です。大社付近には土産物屋さんが数多くあり、必ず大黒・恵比寿の置物があり、必ず大黒様は上位の左に、恵比寿様は右に配置されております。何故ならば大黒様の息子さんが恵比寿様であるからです。

中国より朝鮮半島を経て伝わった仏教・仏壇におきまして、浄土真宗では中央に阿弥陀様、左が開祖の親鸞聖人、一番下位には浄土真宗、中興の祖であり「白骨の御文章」で

有名な蓮如上人の肖像画が掛けられている筈です。しかし現在官公庁、多くの会社では国旗の位置は逆となっています。

さりながら全国氏子青年協議会はその現状を憂い、敢えて以前に倣っております。

又、誤解も生じております。小学校では昔通りの左手、右手と卒業証書を受取り、中学校では右手を先に出しておりました。右手の訳を御聞きしましたら内閣通達に倣ったとの事。

県議会議員の当選証書の伝達式には事務局より作法が示されます。左足を一步出し右足を揃い左、右と手を出して下さい。防衛大学の卒業式でも厳しく申し渡されていると伺いました。

中学校に事情を御話をし、三年掛かりましたが是正された事を有難く思っております。しきたり、文化、小さな事柄でありましょうか、大事な事の一つでは無いでしょうか。

(富山県 素盞鳴神社 宮司)